

玄界灘島嶼域を中心にみた 縄文時代日韓土器文化交流の性格 — 弥生時代早期との比較 —

古澤 義久

要旨 本稿では対馬島、壱岐島、沖ノ島といった玄界灘島嶼域の縄文時代遺跡の展開と縄文土器の特徴について整理し、日韓土器文化交流の展開について考察した。縄文時代後期前葉までの玄界灘島嶼域の遺跡の消長と韓半島南部地域で出土する縄文土器の比率は対応している。また、韓半島系土器は対馬島で集中して出土しており、韓半島からの渡航集団の主要最終目的地は対馬島であり、日韓交流上、玄界灘島嶼域の中でも対馬島が果たした役割が大きかったことを示した。一方、弥生時代早期には九州北部が韓半島からの影響を強く受ける時期であるにも関わらず、玄界灘島嶼域では韓半島との交流要素は比較的少なく、日韓交流上の重要性は相対的に低下しており、韓半島からの渡航集団の最終目的地に九州本島が加わったものと考えられる。このように弥生時代早期の様相と比較することで、縄文時代の日韓交流の特質として①韓半島からの渡航集団は縄文時代から弥生時代早期を通じて玄界灘島嶼域では独自の土器様式を持つことがなかった対馬島を主要最終目的地としたこと、②精神文化上の交流はほとんどみられないという2点が挙げられ、この2点こそが、一部の事例を除外し、基本的に九州縄文土器に韓半島からの影響が認められない主要因であるものと考えられる。

このような、交流の性格・内容の差異と玄界灘島嶼域における三万田式期の時期的な断絶は看過しえないことであり、縄文時代の漁撈民の交流の基礎の上に弥生時代早期の水稲稲作農耕の導入が行われたとする従来の単線的な発展史観は、成立しないということを併せて指摘した。

1. 本稿の目的

玄界灘に所在する対馬島、壱岐島、沖ノ島といった島嶼域は縄文時代の日韓交流を考える上で非常に重要な地域であることは、これまでも実に多くの研究で指摘されているとおりである。従来、日韓交流を考究するのに際し、これらの島嶼域で出土する韓半島系土器に研究の重心が置かれていた。本来であれば玄界灘島嶼域での縄文時代の遺跡の展開を把握し、その上で、出土する韓半島系土器の位置づけを考究しなければ、韓半島系土器の持つ歴史的な位置づけは困難である。ところが、玄界灘島嶼域での発掘調査件数は少なく、また調査面積も非常に狭小で、資料が相対的に少ないこと、交通の不便により現地踏査が困難なこと、文献や情報の入手が困難なこと、さまざまな機関による調査のため資料が分散していることといった種々の条件のため、玄界灘島嶼域における縄文時代遺跡のあり方がどのようなものであったのか総合的に検討することは困難を極めている。そこで、調査が不十分な現状からは完全な検討は不可能ではあるが、本稿では現時点での調査結果に基づく状況把握と検討を行いたいと思う。

筆者はこれまでも縄文時代の日韓交流について述べたことがある。2010年と2011年に発表した拙稿（古澤2010,2011）では、韓半島丸底土器文化に軸足を置いて、韓半島丸底土器文化の最端部における土器文化交流を比較し、対馬海峡における土器文化交流を韓半島丸底土器文化側から相

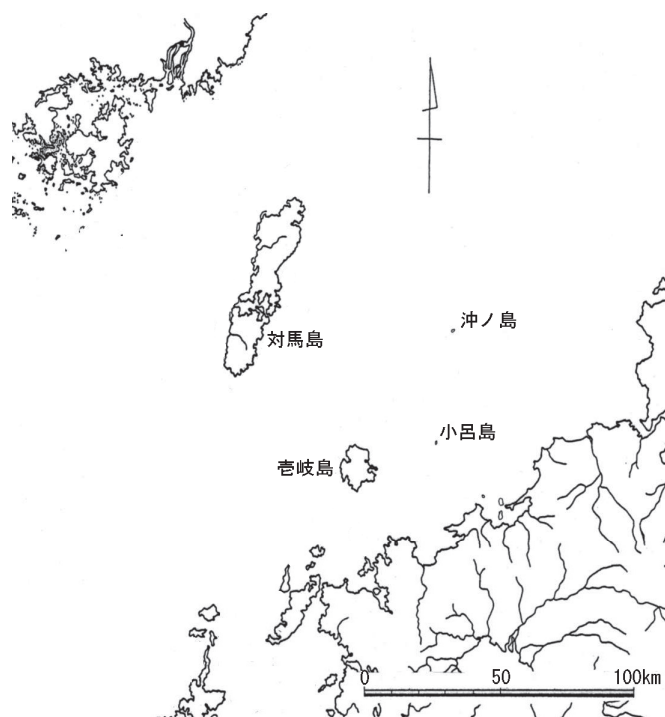


図1 玄界灘島嶼域

対化することを目的とした。これは水ノ江と同が、縄文土器文化に軸足を置いて、縄文文化の境界である対馬海峡（大韓海峡）、宗谷海峡（ラピエールズ海峡）、択捉海峡、南島、伊豆諸島といった縄文文化の最端部を比較し、対馬海峡における交流の在り方を相対化した検討（水ノ江と同 2003, 2007, 2010）に触発されたものであった。

縄文時代の日韓交流の規模や内容、歴史的な位置づけを明らかにするに際しては、相対化しなければ表現することは非常に難しい。水ノ江や筆者の試みは、時期を縄文時代や韓半島新石器時代に固定し、異なる地域と比較することで相対化するという

内容であった。次なる試みとしては地域を固定し、異なる時代・時期を比較するという内容が考えられる。そこで、筆者は玄界灘島嶼域という地域を固定し、その時期的な変遷を追うことで相対化することを試みた。このような目的意識から発表したのが、2013年の拙稿2篇（古澤 2013b,c）であった。このうち『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』では縄文時代後期の対馬島に焦点をあてた予察を述べている。また『季刊考古学』では縄文時代早期から後期の対馬島を中心とした検討を行った。しかし『季刊考古学』では紙幅の都合もあり、その概略を述べるに留まり、縄文時代遺跡全体の展開と日韓交流の関係について十分に述べることができなかったこと、また特集の趣旨から韓半島新石器時代に併行する縄文時代後期中葉までの時期に限定したことという制限があった。本稿では先に述べたように地域を固定し、異なる時期と比較するという趣旨から、対象時期を対馬島で縄文土器が確認される縄文時代早期の押型文土器期から縄文時代晩期後半とも弥生時代早期とも呼ばれる夜臼式期までを原則として取り扱うこととする。特に、縄文時代後期までの時期と弥生時代早期の交流のあり方を比較することは、縄文時代の日韓交流の歴史的意義を考究する上でも非常に重要な課題であるものと考えられる。なお、日韓間の土器編年併行関係は基本的に田中聡一の見解（田中 2003a, 2009b）に従うが、近年、瀛仙洞式が主体を占める黄城洞（최은아 외 2012）で曾畑Ⅰ式が出土したので、瀛仙洞式後半と曾畑式を併行させるといった調整を行っている。

Ⅱ. 玄界灘島嶼域における縄文時代遺跡の概要

1. 対馬島の縄文時代遺跡

(1) 遺跡概要

泉遺跡

対馬市上対馬町泉小字在所に所在する。泉湾の西北隅に突き出た標高10m前後の丘陵の先端部に位置する。明治末年に箱式石棺から二段柄式の磨製石剣が2点出土したとされ、うち1点は現存している。この石棺から3～4m北に所在する石棺を1951年東亜考古学会が発掘調査した。この石棺は半壊した長さ2m、幅0.6mの箱式石棺で(図3)、内部から合口甕棺と思われる土器片(図3-1)と碧玉製管玉1点(図3-2)が出土した。この土器片は甕(深鉢)で内外面条痕調整である。報告者は志多留の土器とは異なるとし、縄文時代晩期の土器に近いとしている(岡崎1953)。森貞次郎は底部形態などから黒川式と比定している(森1966)。沈奉謹は土器片を黒川式と判断し、管玉や同時期と考えられる有柄式石剣から韓半島青銅器文化との相互接触点であると把握している(沈奉謹1979)。一方、高野晋司は、土器は縄文時代のものと考える一方、箱式石棺は対馬島では弥生時代中期から後期に属する事例が一般的であるとし、縄文土器は破片で、石棺の蓋石も数枚欠損していることから、上部からの流れ込みの可能性を指摘している(高野1996a)。

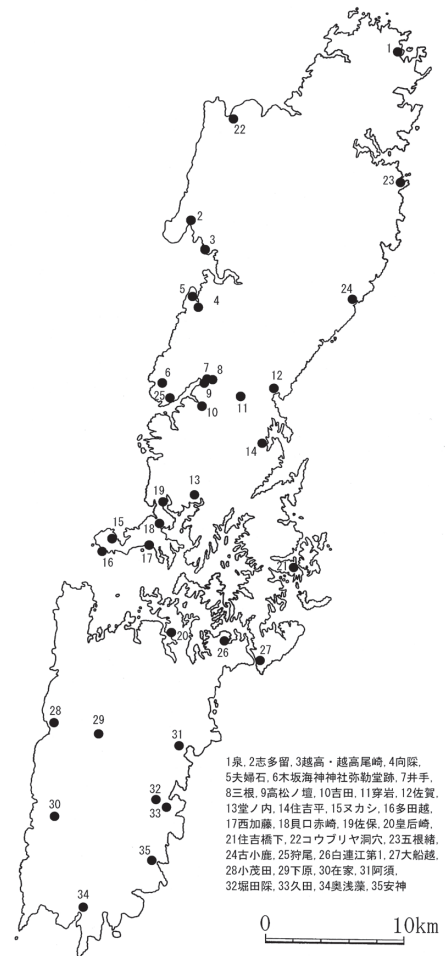


図2 対馬島における縄文時代遺跡

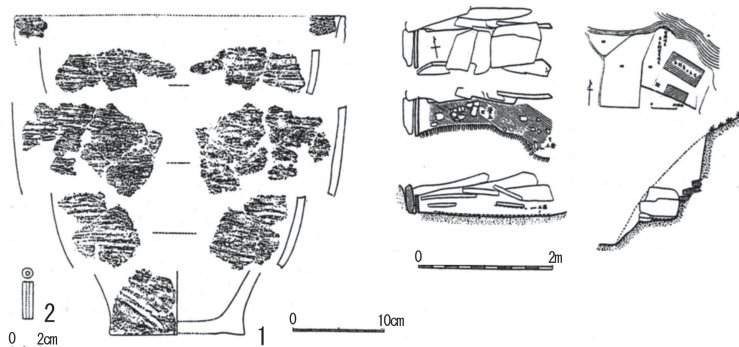


図3 泉遺跡出土遺物・遺構

志多留貝塚

対馬市上県町大字志多留字茂に所在する。大將軍山と乙宮平の間にある標高3～5mの砂洲に立地し、南に志多留川、東に古谷川が流れる。貝塚は現在、天道広場と呼ばれる一帯に広がっている。このほか古谷川の川床で打製石器が発見されているが、土器片の出土は確認されていない。1916年鳥居龍蔵による調査、1948年東亜考古学会による調査、1950年九学会連合対馬共同調査委員会（註1）による調査、1953年対馬遺跡調査会による調査、1972年長崎大学縄文文化研究会による調査が行われている。

1948年の調査では、大礫の間層を挟み、貝層が2枚確認され、上部の貝層からは陶器、寛永通寶などが認められたため、2次堆積によるものと考えられた。貝層を中心に出土した遺物には土器、石器、骨角器が認められる。土器はほとんど貝殻条痕が内外面に施されており、胎土には貝殻粉を含む。底部は平底である（図4-1,2）。石器としては打製石斧、磨製石斧、石錘、打製石鏃などが出土した。また骨針とベンケイガイ製貝輪も出土している（岡崎 1953）。

1950年の調査ではボーリングの結果、古谷川が湾に注ぎ作った狭小な扇状地上に、極めて海岸近くに営まれた遺跡であると推定された。Aトレンチでは20cmの表土、弥生土器から寛永通寶までの遺物を含む50cmの混土包含層の下に縄文土器を含む50cmの黒褐色混貝土層があり、その下に10cm程度の貝層が認められた。以下、砂利、人頭大の円礫層、砂質粘土層であった。Bトレンチでも同様の堆積であったが、貝層中より人骨2体が出土した。Ⅰ号人骨は西北向屈葬で、両腕に貝輪を各1点装着し、右側よりイノシシ牙製の銛、凹石が出土した。人骨は川原石で覆われ、附近から大型の鉢形土器が出土した。人骨は老年の男性である。Ⅱ号人骨は西北向屈葬で、周囲を石で覆っていた。傍らから子安貝1点、凹石1点が出土し、土器の大型破片が多く出土した。人骨は老年の男性である。貝層からは内外面に貝殻条痕が施され、胎土に貝殻粉が混入した土器が出土した（図4-4）。石器としては石錘、凹石、打製石斧などが出土した。またベンケイガイ製貝輪、サルボウ製の玦状貝製品、イノシシ牙製刺突具が出土した（駒井ほか 1954）。杉原荘介もBトレンチの南西側に2m×2mのCトレンチを設定し、調査したが、同様の層序であった（杉原 1951）。この九学会調査時の排土中から採集した資料を永留久恵が保管していたが、この資料の内、1点沈線の施された口縁部片があり、鐘崎式土器であった（岡崎 1953）（図4-3）。

1953年の調査では1号試掘坑から1体の人骨が出土し、肩の附近から翡翠製の珠が出土した。

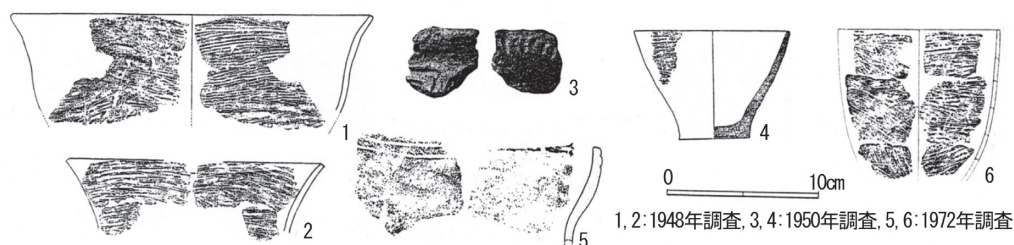


図4 志多留貝塚出土遺物

この珠は乳白色で小さな穿孔が認められた。2号試掘坑から1体の小児人骨が出土した。また4号試掘坑からは茶褐色で無文の滑石混入土器片が出土した（永留 1976）。

1972年の調査は最も大規模であった。貝塚が楕円形に広がっていると推定された。1950年の調査で縄文時代の包含層と考えられた黒褐色混貝土層から寛永通寶などが出土し、後世の攪乱層とされ、その下の貝層（第2貝層）は縄文時代後期中葉のものとされた。人骨は5体出土した。内4体は第2貝層からの出土で、3号人骨は仰臥屈葬で浅鉢が副葬されていた。土器としては北久根山式、西平式が出土し（図4-5）、これらの時期に伴う貝殻条痕が施された粗製土器が多量に出土した（図4-6）。石器としては石鏃、石鋸、石錘、凹石、石皿、磨製石斧、打製石斧、石鑿、異形石器、岩偶などが出土した。骨角器としては結合式釣針の針部、T字形釣針、刺突具、タマキガイ製とされる貝輪などが出土した（坂田 1975）。

越高・越高尾崎遺跡（越高浜遺跡）

対馬市上県町大字越高字ハヤコに所在する。仁田湾内の標高1～7mの海岸に立地する。遺跡附近はかつては広い平坦地で畑地として利用されていたが、海水の浸食により現在では畑地が失われ、山裾の傾斜地に崖面を露出している。越高尾崎遺跡は越高遺跡の南西方約50mの地点の海岸である。越高遺跡と越高尾崎遺跡は一連の遺跡であると考えられ、周知の埋蔵文化財包蔵地としては「越高浜遺跡」という名称で遺跡地図（長崎県教育委員会 1994）に登載されている。長崎県教育委員会では越高遺跡を越高浜遺跡B地点、越高尾崎遺跡を越高浜遺跡A地点と呼称している。1976年上県町教育委員会と長崎大学医学部解剖学第2教室が越高遺跡を発掘調査した。1978年上県町教育委員会が主催し、別府大学考古学研究室が越高尾崎遺跡を発掘調査した。その後1996年長崎県教育委員会が越高遺跡・越高尾崎遺跡の発掘調査を実施した。このほか表面採集が幾度か行われている。1993年に安楽勉と阿比留伴次は表面採集を行っている。東貴之は1998年に越高尾崎遺跡で、2004年に越高・越高尾崎遺跡で表面採集を行っている（東 2007）。2001年に九州大学考古学研究室が採集した資料もある（鐘ヶ江・三辻 2004）。

1976年の越高遺跡調査では土坑墓が2基検出されている。1号土坑墓は隅丸方形で、人骨の頭向は東で屈葬されていたとみられている。隆起文土器が副葬されていた。2号土坑墓は楕円形で、土坑上部は拳大の石で覆われていた。人骨の頭向は北東で、屈葬されていた。包含層から出土した土器は大部分が隆起文土器である（図5-1～6）。深鉢のほか鉢、壺などもみられる。縄文土器は少量の前平式が出土している。石器としては石鏃、石匙、削器、搔器、石槍、石斧、礫器、敲石、石錘、石核、剥片などが出土している（坂田 1978a）。

1978年の越高尾崎遺跡の調査では4層で1基、2層で2基の炉址が検出されている。4層の3号炉址は円形に礫を配し床面は焼けていた。2層の1号炉址と2号炉址も礫を円形に配しており、床面は焼けていた。6層からは韓半島系土器が主体的に出土している。縄文土器としては縄文時代早期末とみられる貝殻条痕土器が1点出土している（図5-7）。韓半島系土器としては、隆起文やこ

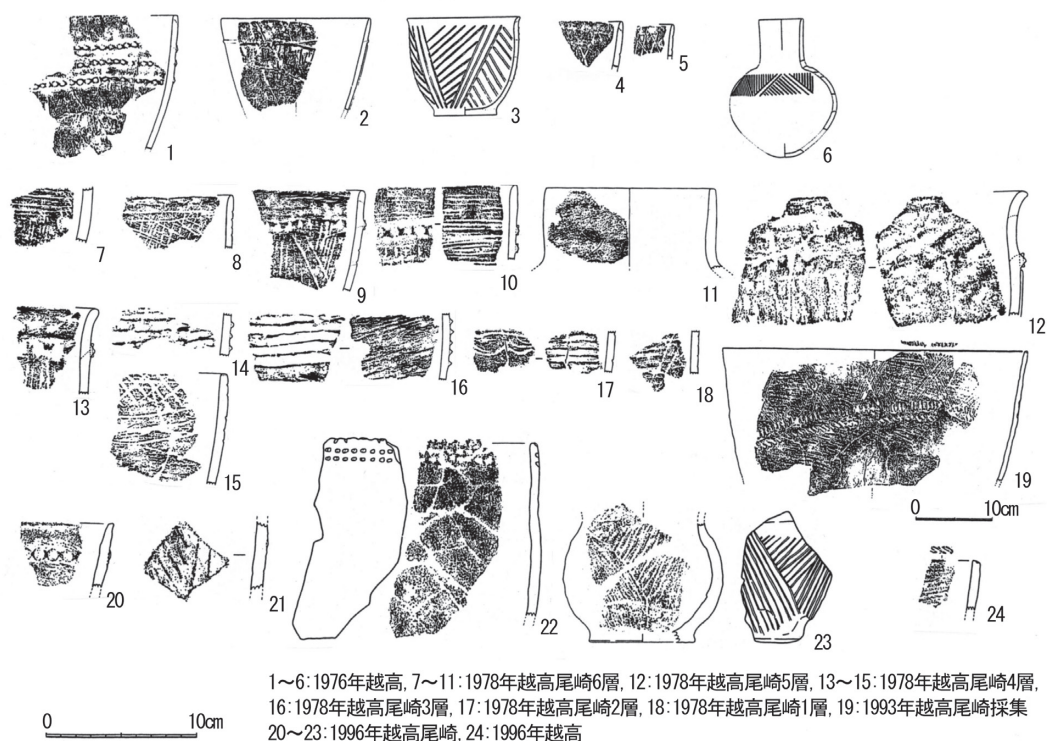


図5 越高・越高尾崎遺跡出土遺物

れに伴う沈線文・刺突文深鉢、壺などが出土している（図5-8～11）。隆起文土器の中には貝殻条痕で調整されたものもみられる（図5-10）。石器としては石鏃、削器、石槍、石斧、礫器、石錘、敲石、砥石などがみられる。5層からは韓半島系の土器のみが出土しており、隆起文やこれに伴う沈線文土器などが出土している（図5-12）。石器としては石鏃、石斧、剥片などがみられる。4層からは縄文土器と韓半島系土器が出土している（図5-13）。縄文土器としては塞ノ神式、轟B式（図5-14）が出土している。韓半島系の土器は隆起文土器が出土している。石器としては削器、搔器、剥片、石核、石庖丁様石器、石剣様石器、打製石斧、礫器、敲石、砥石などがみられる。3層からは縄文土器のみが出土し、轟B式（図5-16）、西唐津式がみられる。石器としては削器、剥片、石核、石錘、敲石、砥石、石皿などが出土した。2層からは縄文土器と韓半島系土器が出土し、縄文土器には轟B式、西唐津式（図5-17）、曾畑式がみられ、韓半島系土器は隆起文土器が出土している。石器としては削器、搔器、剥片、石核、礫器、石錘、敲石などが出土している。1層からは縄文土器が出土し西唐津式、曾畑式（図5-18）がみられる。石器としては削器、剥片、石核、礫器などが出土した。韓半島系土器は下層で多く、上層では縄文土器が多く出土している傾向があることが指摘されている（坂田1979）。

1996年の調査では越高尾崎遺跡で隆起文土器とこれに伴う沈線文土器、口唇刻目を有する土器のほか貝殻条痕が施された土器なども出土した（図5-24）。石器としては頁岩製の大型のスクレイ

パー、黒曜石核などが出土している。越高遺跡では隆起文土器、刺突文土器、隆起文土器の伴う沈線文の施文された壺などが出土した（福田・東 1998）（図 5-20 ～ 23）。

1993 年、安楽勉と阿比留伴次が採集した資料（安楽 1994）に口唇に刻目を持ち押点文と斜格子文が施文され、表面を貝殻条痕で調整している大型の深鉢がある（図 5-19）。この資料は韓半島系土器であるとする見解もあるが、筆者は西唐津式であると考えている。

向陰遺跡

対馬市上県町久原字向陰に所在する。鹿見湾に臨む平地に立地する。ここで、外面に貝殻による押引文が施され内面に貝殻条痕が施された土器が採集されており縄文時代早期末の政所式であるとみられている（永留 1975, 坂田 1980）。

夫婦石遺跡

対馬市上県町大字久原字夫婦石に所在する。仁田湾の南岸に鹿見湾と対馬海峡をへだてる細長い丘陵があるが、先端部附近の鹿見湾に面した部分に八幡神社があり、遺跡は神社境内附近の標高 10m から海岸部分の標高 0m に立地する（図 1）。1988 年に長崎県教育委員会により範囲確認調査が、1989 年には対馬文化財調査委員会による発掘調査が、1993 年にも長崎県教育委員会による範囲確認調査が行われた。

1988 年の調査は海岸部分に A 調査区～C 調査区として 2×2m の試掘坑が 3 箇所設定された。その結果、C 調査区第Ⅶ層から刺突文の施された土器（図 6-1）や無文の土器、C 調査区Ⅵ層から水佳里Ⅰ式（図 6-2,3）、B 調査区Ⅲ a～Ⅲ d 層から水佳里Ⅰ式、水佳里Ⅱ式（図 6-4）、阿高式系（図 6-6）、石鏃、スクレイパー、石斧、石核、黒曜石製・頁岩製剥片が出土した。また瀛仙洞式（図 6-7）、水佳里Ⅰ式初葉土器（図 6-8）、阿高式（図 6-10）が表面採集された（副島 1992a,b）。

1993 年の調査地点は標高約 1m の八幡神社境内を中心とする範囲に設定され、TP1 ～ TP6 として 2×2m の試掘坑を 6 箇所、計 24 m²の面積について調査が実施された（副島 1994）。このうち縄文時代遺物が確認されたのは TP1、TP2、TP4、TP5 であった。TP2 では 13 層で瀛仙洞式（図 6-11）、水佳里Ⅰ式、曾畑Ⅱ式（図 6-12,13）、凹石、使用のある剥片など、12 層で隆起文土器（図 6-14）、瀛仙洞式（図 6-15 ～ 17）、水佳里Ⅰ式（図 6-18）、水佳里Ⅱ式、11 層で瀛仙洞式（図 6-19 ～ 21）、水佳里Ⅰ式（図 6-22）、水佳里Ⅱ式、曾畑式、阿高式系、石斧未成品、黒曜石剥片など、8 層で縄文時代後期前葉、中葉の粗製土器、つまみ形石器、黒曜石剥片など、7 層で鐘崎式（図 6-23）、大型剥片鏃、剥片鏃、黒曜石剥片などが出土した。また TP4 では 5 層で鐘崎式（図 6-24,25）、4 層で縄文時代後期中葉土器、弥生土器、黒曜石剥片などが出土した（副島・古澤・川道 2013）。

木坂海神社弥勒堂跡

対馬市峰町木坂タカイノクチに所在する。西海岸御前浜から小河川にそって 400m 程度遡った場



図6 夫婦石遺跡出土遺物

所にある木坂海神社境内に立地する。1990年に峰町教育委員会が調査主体となり長崎県教育委員会が調査を支援した。13～14世紀の高麗青磁をはじめとする多数の中世遺物が出土し、『対州神社誌』にみえる弥勒堂であることが特定された（安楽・阿比留1993）。この調査の際、押引文の土器が1点出土し、短斜線文が横位に施文された櫛目文として報告された（副島1992）。しかし、筆者が実見したところ、改めて図示したとおりこの土器は斜位に爪形工具による押引文が施された土器で、典型的な短斜線文の施文された水佳里Ⅰ式の口縁部ではないことが明らかになった（図7）。胎土には石英・長石などの細かな砂粒が混じる。

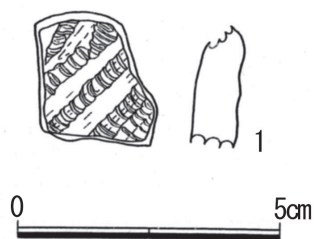


図7 木坂海神社弥勒堂出土遺物

井手遺跡

対馬市峰町三根下モ在家に所在する。三根湾に注ぐ三根川河口から約7～800mの沖積地で、三根川の左岸にある低丘陵の麓に立地する。1959年に阿比留嘉博と永留久恵により2箇所の小トレンチが設定され調査された。1990年に峰町教育委員会が主催し永留久恵と下條信行が調査を行った。2002年には「峰町日韓共同遺跡発掘交流事業」として峰町教育委員会と東亜大学校により発掘調査が行われた。

1959年の調査では板付Ⅰ式、板付Ⅱ式、須玖Ⅱ式、挟入柱状片刃石斧が出土した（永留1964, 真野1974）。

1990年の調査では1959年の調査区東南4mの地点にAトレンチ、Aトレンチの南30mの丘陵麓にBトレンチを設定したが、Bトレンチでは得るべき成果はなかった。Aトレンチ最下層の11層からは縄文晩期の甕・壺を主体とし、1点板付Ⅱ式壺を含む。10・9層は無遺物層で、8・7層からは突帯文系統の甕・壺（図8-1～3）、如意形口縁、有段如意形口縁のほかoi半貫通の孔列土器（図8-4）、頸部縦磨研の赤色磨研土器（図8-5）、甕の口縁下に附着する把手（図8-6）といった韓半島系土器が出土した。6層は有段如意形口縁の板付Ⅱ式が出土した。5層は板付Ⅱ式から須玖Ⅱ式が出土し、4層からは古墳時代土師器が出土した（峰町教育委員会1990, 下條1996）。

2002年の調査では、褐色土の8層から夜臼式期の刻目突帯文土器（図8-7～10）、韓半島系の口唇刻目内湾口縁甕（図8-12）、壺（図8-13）などが出土している。このほか8層では滑石混入土器も出土している（図8-11）。黒曜石剥片も出土した。7層では溝状遺構が検出されているが、突帯文土器と板付式が出土している。石器としては柱状磨製石斧、敲石が出土している。この2002年の8・7層は1990年の8・7層に対応するものとみられている（俵2009）。

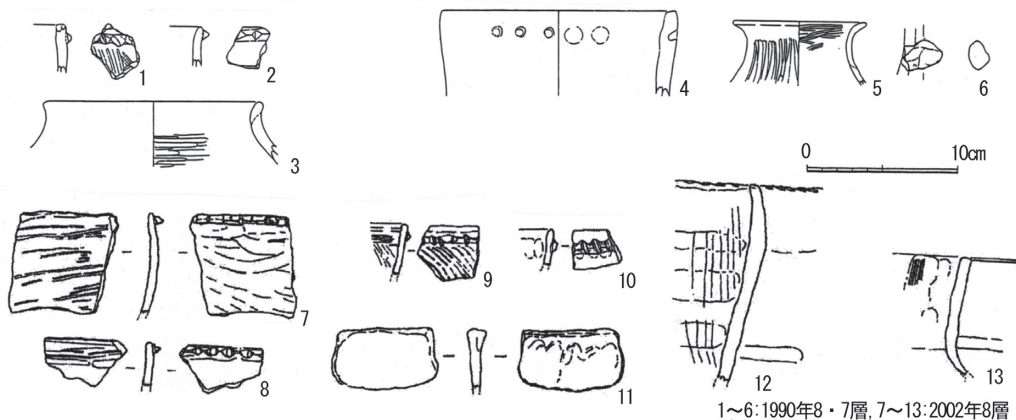


図8 井出遺跡出土遺物

三根遺跡山辺区

対馬市峰町三根に所在する。三根川左岸に開口した谷部にある舌状丘陵部周辺に立地している。井手遺跡から約500mの位置にある。1999～2002年に峰町教育委員会により発掘調査された。丘

陵中央部の比較的低い土地（6・7区）で夜臼式期の土器が出土している（峰町 2003, 俵 2009）。

高松ノ壇（タカマツノダン）遺跡

対馬市峰町三根字エイシに所在していたが、現在では消滅している。三根湾に注ぐ三根川河口附近に立地していた。1910～1920年代及び1930年代の2度に亘り開墾された際黒曜石製石鏃が出土したという。また、1948年東亜考古学会による踏査が行わ

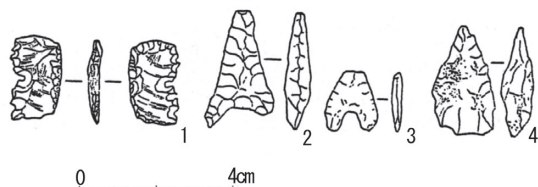


図9 高松ノ壇遺跡出土遺物

れた際には黒曜石剥片、滑石粉末を混入した厚手の土器片、弥生土器片、須恵器片が採集された（岡崎 1953）。滑石混入土器は花盆形土器などの楽浪系土器でなければ、曽畑式か並木・阿高式系ということになるが、厚手という点からは並木・阿高式系の可能性が高いと思われる。1950年の九学会連合対馬共同調査委員会が踏査した際には種畜場広場一帯及び舌状丘陵基部東南側裾に隣接する甘藷畑から黒曜石核6点、黒曜石剥片56点、石鏃3点（図9-2～4）、石鋸1点（図9-1）、土師器片2点が採集された（渡邊 1954）。滑石混入土器や石鋸から縄文時代後期前葉を中心とする時期の遺跡であった可能性がある。

吉田遺跡

対馬市峰町大字吉田字古河に所在する。三根湾の支浦である吉田浦に注ぐ吉田川右岸のテンドウの森と呼ばれる舌状台地の先端部、標高約7～8mに立地する。1954年に曾野寿彦、増田精一らによる調査、1975年に峰町教育委員会主催による別府大学の調査、2000年に九州大学による調査が行われている。

1954年の調査では貝層が確認されその上下に包含層が認められた。貝層下部の包含層は更に二分される。上部の茶褐色土層及び貝層からは夜臼式土器（図10-1～5）、打製石斧が出土した。下部の岩盤直上の灰褐色土層からは阿高式系土器が出土した。表土からは夜臼式土器及び弥生土器が出土した。原報告者は土器をA～D類に分類し、このうちA類を板付式、B～D類を夜臼式とし、貝層からはA～C類、茶褐色土からB～D類が出土したとしている（曾野・増田 1961）。しかし、橋口達也はA類も夜臼式土器とし貝層、茶褐色土ともに夜臼式のみを出土する単純層とした（橋口 1974）。

1975年の調査時点では夜臼式の貝層が道路建設により大きく削平されていたため、貝塚から北西側の台地上が調査された。5層が遺物包含層で、阿高式、坂の下式（図10-6,7）、韓半島系の沈線文土器（図10-8）が出土した。また、イノシシ形土製品も出土している（図10-9）。縄文時代の石器としては打製石斧、削器、磨石、敲石、砥石などがした。この5層からは少量の夜臼式土器、弥生土器、有茎磨製石鏃も出土している（坂田 1975b）。

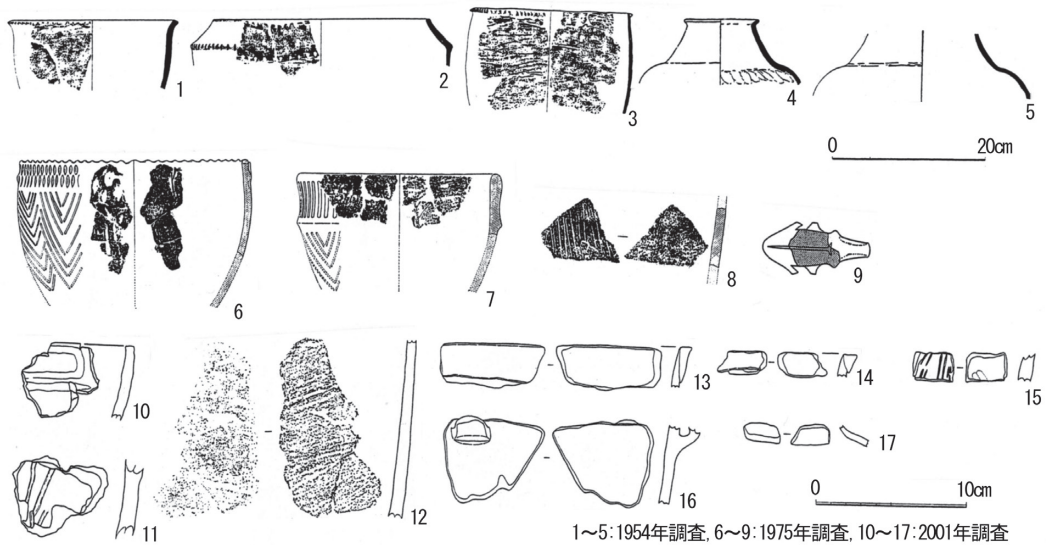


図 10 吉田遺跡出土遺物

2000 年の調査では 1975 年の調査区附近の台地上が対象となった。5 層が遺物包含層で、土器としては坂の下式（図 10-10 ～ 12）を主体とし、中津式などがみられ、水佳里Ⅲ期の二重口縁土器（図 10-13,14）や沈線文土器（図 10-15）、把手附鉢（図 10-16）、壺（図 10-17）も出土した。石器は打製石鏃、スクレイパー、石核、剥片、石斧、磨石、石皿などが出土した（宮本編 2004）。

穿岩遺跡

対馬市峰町穿岩附近に所在する。三根から佐賀に至る道路の標高約 60m に立地する。1950 年の九学会連合対馬共同調査委員会が踏査した際に黒曜石剥片 1 点が採集されている（渡邊 1954）（図 11）。

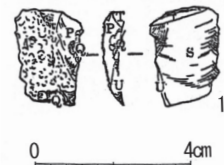


図 11 穿岩遺跡出土遺物

佐賀貝塚

対馬市峰町大字佐賀に所在する。東海岸佐賀湾に望む駄道川河口域の狭い海岸平野に立地する。佐賀からは駄道川を遡り、佐賀内川水系に沿って西進すると三根に至り、対馬島の東海岸と西海岸を結ぶ最適なルートとなっている。1954 年に曾野寿彦、増田精一、永留久恵、阿比留嘉博らによって発掘調査が行われた結果、縄文時代中期の阿高式土器が発見されている（永留 1964,1975,2009, 阿比留・永留 1986）。1985 年に峰町教育委員会を調査主体とし、長崎県教育委員会が実施した緊急調査の結果、縄文時代中期の貝層、縄文時代後期の貝層、住居址 3 基、埋葬遺構が発見された。縄文時代の貝層（4 層）からは並木式（図 12-2）、阿高式（図 12-3）が出土した。縄文時代後期の貝層（3 層,3' 層）からは鐘崎式（図 12-4）、北久根山式（図 12-5）、宮下式およびこれに伴う胎土に貝殻粉を含むことが多い貝殻条痕粗製土器（図 12-6）が出土した。また、大型石鏃、石銚、剥

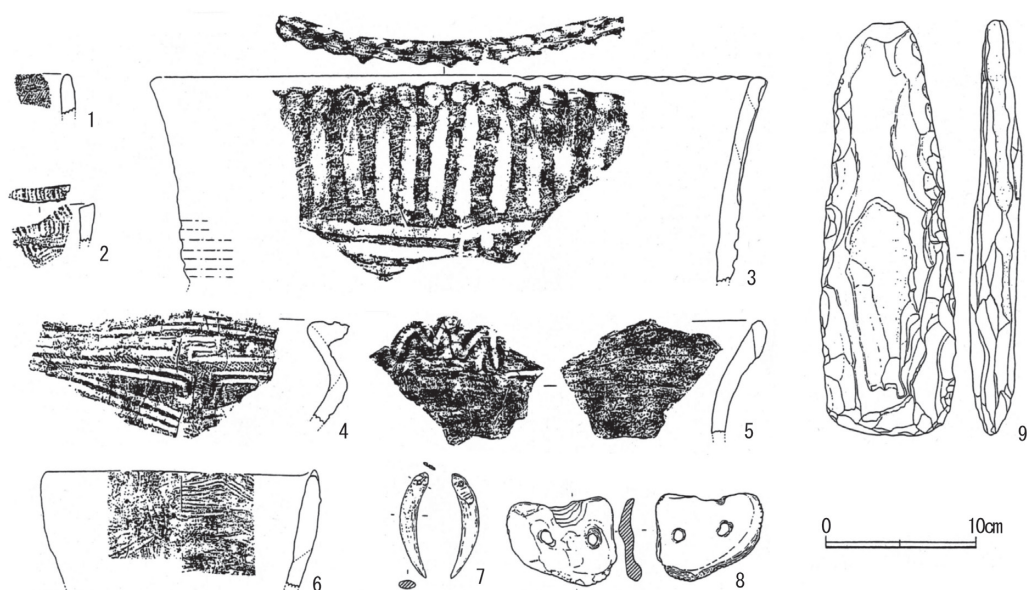


図 12 佐賀貝塚出土遺物

片鏃、つまみ形石器、搔器、石鋸等の剥片石器、312 点に及ぶ石斧（図 12-9）、叩石、磨石、凹石、石皿、石錘、大型刃器、砥石などの石器、刺突具、釣針等の骨角器、キバノロ上顎犬歯で製作された垂飾等の装飾品（図 12-7）、ベンケイガイ、サルアワビ、ユキノカサ、タマキガイ等で製作された貝輪、マガキ製の貝面（図 12-8）等多種多彩な遺物が多数出土した。1 号住居址は南北 2.2m、東西 1.5m の楕円形の範囲に掘られた柱穴群で、堅穴は検出されていない。床面が硬くしまっている。2 号住居址は径 250cm 程度、深さ 30cm 程度の円形堅穴を掘り、大小 26 基の柱穴が堅穴外に掘られている。柱穴の側面と床面には平たい石を配し、崩壊を防いでいる。3 号住居址では東西 4m、南北 3m の範囲に 25 基の柱穴がまとまって検出されている。2 号住居址と同様に柱穴の壁面と床面に平たい石を配している例が多い。この住居址では 30 点以上の石斧や砥石がまとまって出土しており石斧製作工房といった性格が想定される。人骨は 6 体検出され、埋葬状態が検出されたのは 4 体である。1 号人骨は土壌に屈葬状態で埋葬されていた。右手側に扁平石斧があり、人頭大の礫で覆われていた。2 号人骨は屈葬状態で検出された。3 号人骨は子供の埋葬骨であり屈葬と考えられる。4 号人骨は屈葬状態で検出され、全体が人頭大の礫で覆われていたようである。頭部にアワビの殻が 5 点あり、左膝の部分にもアワビが 1 点残っていたことからアワビの殻で全身を覆っていたものとみられている。5 号人骨は大腿骨のみが残り、散乱骨とも考えられる。本遺跡の特徴として多量に出土した石斧から石斧を量産し交易を行っていたということが想定されている（正林 1985, 1986a, b, 1987, 1989a）。ただし原石や剥片が出土していないことから露頭附近で荒割りして持ち込まれ加工されたという見解もある（古門 2001）。このほかに 1985 年の発掘調査終了に際して、隣接家屋のブロック塀附近の掘り残し部分から韓半島南部地域の水佳里 I 式に属する赤彩された短斜線文土器の口縁部 1 点が出土している（正林 1989b）。

堂ノ内遺跡

豊玉町仁位清玄寺原堂ノ内に所在する。仁位川に向う緩い標高5～10mの傾斜面に立地する。この附近では打製石斧（図13-3,4）、凹石（図13-2）などが採集されている（岡崎1953）。1950年の九学会連合対馬共同調査委員会が踏査した際にも黒曜石剥片（図13-1）などが採集されている（渡邊1954）。

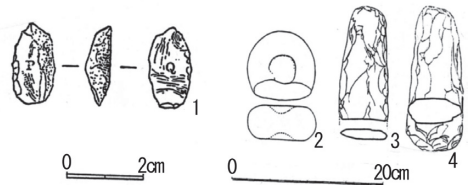


図13 堂ノ内遺跡出土遺物

住吉平貝塚

対馬市豊玉町大字曾字浜に所在する。対馬島東海岸の曾浦の最も奥まった部分に流れ込む曾川の左岸に住吉平と呼ばれる標高10～15mの舌状台地が延びており、この台地の東側に貝塚群が点在している。1973年長崎県教育委員会と豊玉町教育委員会の共催により、長崎大学医学部解剖学第2教室が調査を実施した。遺物はA～D貝塚と4箇所を確認された貝塚とA貝塚とB貝塚の間に堆積した土層である黒褐色土層から出土した。A貝塚では夜臼式のみが確認されている（図14-1～4）。黒褐色土層では夜臼系甕（図14-5）、板付Ⅰ式が出土した。B貝塚では少量の夜臼系壺のほか板付Ⅰ式、板付Ⅱ式および柱状片刃石斧、石皿、砥石、凹石、貝刃器などが出土した。C貝塚では板付Ⅱ式が出土した。D貝塚では夜臼式（図14-6）が採集された（坂田1975a）。

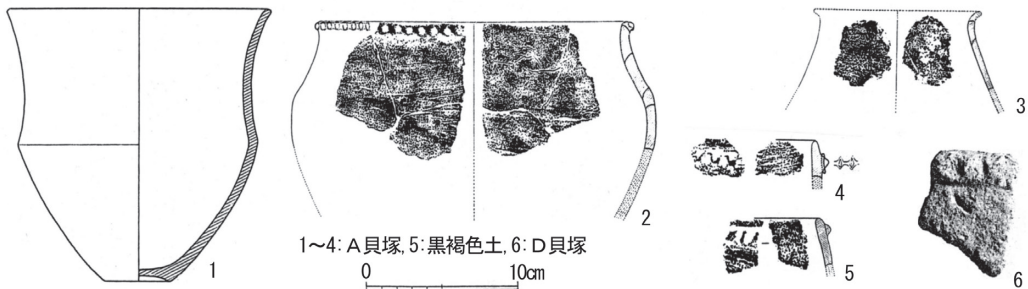


図14 住吉平貝塚出土遺物

ヌカシ遺跡

対馬市豊玉町廻字ヌカシに所在する。海に面した小さな谷間で、海岸に近いならかな扇状地に立地する。1974年豊玉町教育委員会が主催し、別府大学文学部考古学研究室が調査を行った。Ⅳ層では炉址1基が検出されている。Ⅳ層の土器には阿高式、坂の下式（図15-1）と瀛仙洞式（図15-2）がみられる。石器としては石鏃、石錐、削器、石鑿、磨製石斧、打製石斧、石錘、敲石、凹石、磨石などがみられる。Ⅲ層では炉址2基、集石1基、柱穴1基が検出された。集石は敲石、凹石、磨石、石斧が一括して出土したものである。Ⅲ層の土器には坂の下式（図15-3）、韓半島系壺（図15-4）などがみられる。石器としては削器、搔器、磨製石斧、打製石斧、石皿、敲石、凹石、磨石、石錘などがみられる。Ⅱ層の土器には坂の下式（図15-5,6）と水佳里Ⅲ式の二重口縁土器（図15-

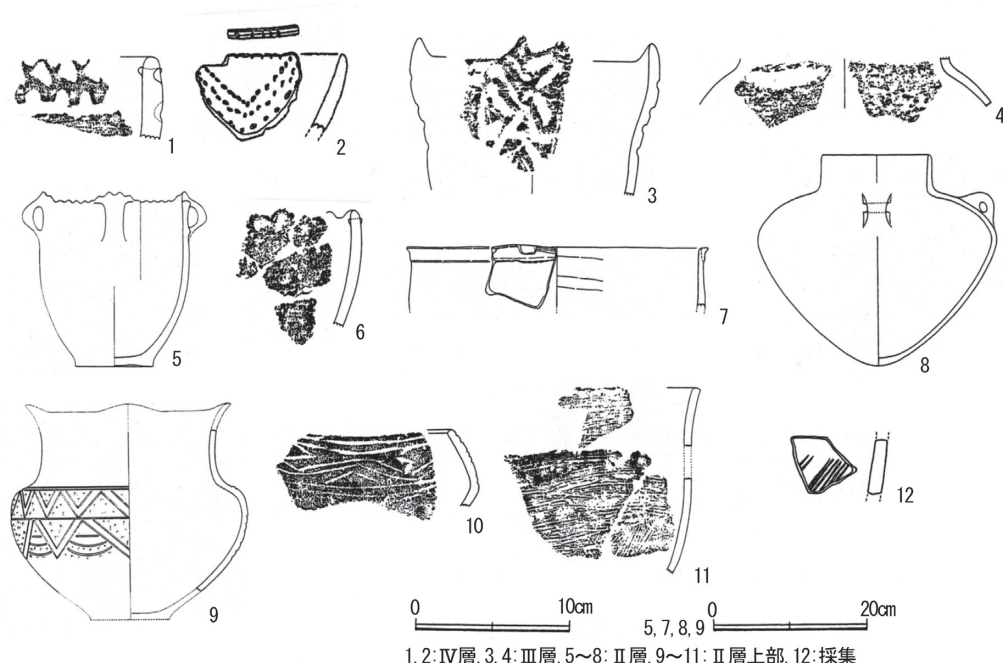


図 15 ヌカシ遺跡出土遺物

7)、把手附壺（図 15-8）がみられる。石器としては削器、搔器、磨製石斧、打製石斧、砥石、敲石、凹石、磨石などがみられる。II層上部では北久根山式・宮下式（図 15-9,10）や内外面貝殻条痕による調整の施された粗製土器（図 15-11）が出土している（坂田 1978b）。このほか水佳里Ⅲ期の沈線文土器が採集されている（図 15-12）。

多田越遺跡

対馬市豊玉町唐洲字多田越に所在する。浅茅湾の入口附近の只越岬に立地し、標高は0～5mである。波浸食によって露出した崖面に赤褐色礫土の遺物包含層が観察される。1996年、東貴之が踏査し、新規発見された。坂の下式（図 16-1,3）、貝殻条痕土器（図 16-2）、沈線文施文土器（図 16-4）、鯨底の底部、石器などが表面採集されている（東 2005）。

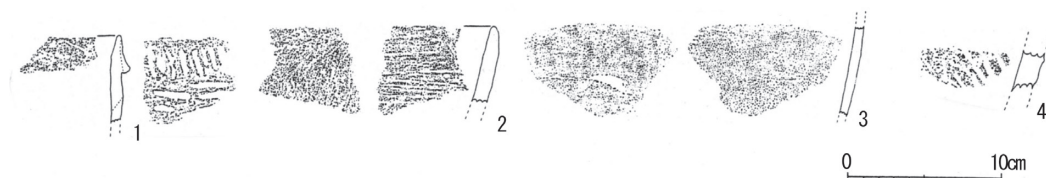


図 16 多田越遺跡出土遺物

西加藤遺跡

対馬市豊玉町嵯峨字加藤に所在する。浅茅湾を望む小さな湾の奥に立地する。加藤小学校裏に遺物包含地があり、加藤小学校前の海底遺跡がある。1968年加藤小学校裏遺物包含地で遺物が採集

され、1968年～1969年にかけて加藤小学校前の海底遺跡で遺物が採集された。加藤小学校裏遺物包含地で採集された資料には坂の下式（図17-1



図17 西加藤遺跡出土遺物

～4)と焼成後穿孔の土製円盤がある。加藤小学校前の海底遺跡で採集された資料には坂の下式（図17-5～8）のほか搔器、石錐、石鏃、縦長剥片などがある（西1974a）。1974年に海底遺跡部分で発掘調査が行われているが、正式な報告はなく、永留久恵や坂田邦洋による断片的な記述のみが存在する。海底下1.8mで田村式とみられる押型文土器、海底下1.5mで船元式、南福寺式、韓半島沈線文土器、海底下1.4～1.3mで鐘崎式が出土したという（永留1975, 坂田1980）。

貝口赤崎遺跡

対馬市豊玉町貝口字テナシ浦に所在する。仁位湾の西側、中央附近で深く入り込んだ貝口浦の最奥部に西から突出した岬に立地する。夜臼式土器片が1点採集されている（高倉・渡部1974）（図18）。

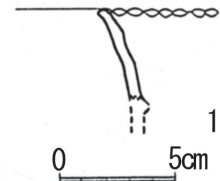


図18 貝口赤崎遺跡出土遺物

佐保遺跡

対馬市豊玉町佐保に所在する。佐保川の流れて沿って開けた小さな原の山裾で石斧（図19-1～4）4点が重なり合って出土した。同時に馬鐸、腕輪、巴形銅器などが出土したというが、共伴関係には疑問があるとされる。石斧が重なり合って出土した地点から2mほど離れた地点から石斧（図19-5）が1点採集された（永留1967）。これらの石斧の時期は不明であるが、縄文時代のものである可能性があるとされる（永留1967）。

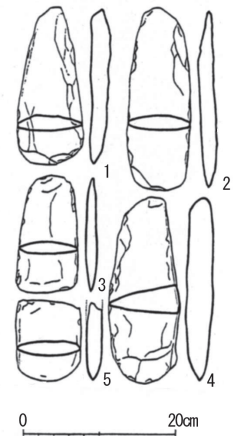


図19 佐保遺跡出土遺物

皇后崎遺跡

対馬市美津島町箕形字皇后崎に所在する。西海岸の黒瀬湾と洲藻浦の間に突き出た皇后崎に位置する。1952年～1954年対馬遺跡調査会により対馬島各地で調査が行われた際、踏査され、黒曜石破片5点および素焼きの土器片2,3点が表面採集された。黒曜石のうち2点は表裏より周縁剥離を施し、一辺が鋸歯状を呈している（図20）。報告者の増田精一は五島市福江の石鋸と対比している（増

田 1963)。

住吉橋下遺跡

対馬市美津島町鴨居瀬字住吉に所在する。東海岸芦浦に続く住吉瀬に面する標高 18m の海岸に所在する。曽畑式や黒曜石剥片が採集されたという（安楽 1994）。

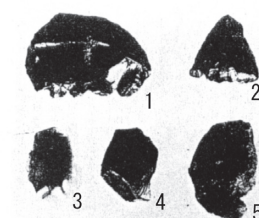


図 20 皇后崎遺跡出土遺物

その他の遺跡

以上の遺跡のほかに 1985 年、長崎県教育委員会により実施された分布調査（長崎県教育委員会 1995）により発見された縄文時代と考えられる遺跡がある。長崎県埋蔵文化財包蔵地カードに基づき表 1 のように整理したが、出土遺物のほとんどが黒曜石剥片などであり、縄文時代の遺跡ではない可能性もある。このほか中山、井口浜、佐護、佐護白岳、雞知、阿連などで石斧や凹石が採集されているが、帰属時期は不明である（岡崎 1953）。また、永留久恵によると島山で長さ 38cm の大型の打製石斧が出土し、志加々では多くの石斧が一括で出土し、糸瀬では 6 点の石斧がまとめて出土しているとされるが（永留 1975）、帰属時期は不明である。さらに、貝鮓（字スクエ）、鏝川、小綱、貝口（字カリンコ）、仁位（字松原）などで磨製石斧や凹石が採集されているが帰属時期などは不明である（西 1974b）。このうち貝鮓と鏝川の磨製石斧は擦切技法によるもので注目される。

(2) 対馬島の縄文時代遺跡の特徴

対馬島の縄文文化については永留久恵、坂田邦洋、久原巻二、安楽勉らによって整理されている（永留 1964, 1975, 2009, 坂田 1980, 久原 1988, 正林 1995, 安楽 1996）。永留久恵は対馬島における縄文時代遺跡が西海岸に多く分布することを指摘し、志多留や佐賀は拠点的な集落であった一方、多くの遺跡は短期に利用された漁撈民の一時的な小規模集落であると考察している（永留 2009）。久原巻二は対馬島の縄文時代の遺跡は北側か西側に風波を防ぐ山地や丘陵があり切り立った岩石海岸が途

表 1 対馬島の縄文時代遺跡

遺跡名	所在地	立地	標高	種別	出土遺物
コウブリヤ洞穴	上県町コサヤ北里	海岸	2m	洞穴・岩陰	黒曜石剥片
五根緒	上対馬町五根緒小字平山	丘陵	20～30m	遺物包含地	黒曜石剥片
古小鹿	上対馬町小鹿字古小鹿	山裾	5～10m	遺物包含地	石斧6点
狩尾	峰町狩尾字狩尾隈	平地	5～10m	遺物包含地	黒曜石剥片
白連江第1	美津島町大字竹敷	岬先端	5～10m	墳墓(弥生)	
大船越	美津島町大字大船越字下在所	平地	10m	遺物包含地	石鏃, 黒曜石剥片
小茂田	厳原町小茂田字乗越	砂堆	4～5m	遺物包含地	黒曜石剥片
下原	厳原町小茂田下原	丘陵	30m	遺物包含地	黒曜石剥片
在家	厳原町久根田舎字在家	平地	20～25m	遺物包含地	黒曜石剥片
阿須	厳原町北里滝が隈	丘陵斜面	30～40m	遺物包含地	凹石
堀田隈	厳原町堀田隈	丘陵	25～30m	遺物包含地	石鏃, 黒曜石剥片
久田	厳原町久田	丘陵傾斜面	30m	遺物包含地	黒曜石剥片
奥浅藻	厳原町奥浅藻	丘陵先端	10m	遺物包含地	黒曜石剥片
安神	厳原町安神	砂堆内側斜面	4m	遺物包含地	黒曜石剥片

切れて、湾奥に小さな浜がある入江に多く立地し、分布は西海岸に多く見られることを指摘している。また弥生時代の遺跡の分布が仁田川、佐護川、三根川といった河川沿いに多く分布するのと対称的に、縄文時代の遺跡は河川沿いには立地せず、湾の奥の小平地を集約的に占拠しているという特徴も指摘している（久原1988）。また、木村幾多郎は対馬島の縄文時代遺跡が湾の最奥のやや広い平坦地に立地するものの、韓半島系土器が主体を占める遺跡は湾の入口附近の狭い谷に多く、棲み分けをしていたのか、一時的滞在のくり返しであったためそれほど広い土地を必要としなかったという可能性を

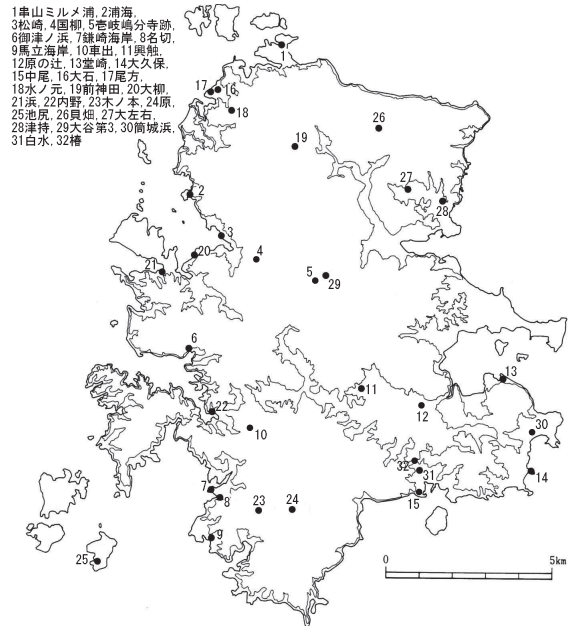


図21 壱岐島における縄文時代遺跡

指摘している（木村1997,2003）。また、従前より韓半島系土器が多く出土する遺跡は対馬島西海岸に多いと指摘されており（宮本1990）、李相均は海流の影響であるとしている（李相均2003）。

対馬島では永留らの指摘のとおり縄文時代早期から後期前葉にかけて西海岸に遺跡が多く立地する。この状況に変化が生じるのは、鐘崎式期である。この時期に対馬島では比較的大きな居住遺跡である佐賀や志多留が形成される。佐賀は東海岸に立地するが、対馬島の西海岸と東海岸を繋ぐ結節点に位置し、壱岐島を介した九州本島との交流拠点となったものと考えられる。三万田式期には対馬島では遺跡がほとんどみられず、その後の遺跡としては、黒川式期の可能性がある泉、その後の夜臼式期の井手、住吉平、吉田などの遺跡が挙げられる。それまでの遺跡の立地とは異なり、住吉平では東海岸に立地している。また、井手はそれまで利用されることの稀であった比較的大きな河川のそばに立地しており、三万田式期の断絶期をはさみ遺跡立地が変化したものと考えられる。

2. 壱岐島の縄文時代遺跡

(1) 遺跡概要

串山ミルメ浦遺跡

壱岐市勝本町東触字白濱辻、字小串に所在する。遺跡は天ヶ原から小串へと伸びる陸繋砂洲上に位置し、東は外海、西はミルメ浦に臨む。1980年、勝本町教育委員会が九州大学考古学研究室の参加を得て実施された調査により、並木Ⅱ式（図22-1）が2点出土した（平川編1985）。また、

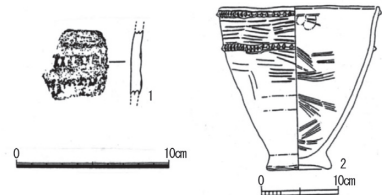


図22 串山ミルメ浦遺跡出土遺物

1996年の海浜部潮間帯における調査では1点の完形に近い夜臼式の刻目突帯文甕（図22-2）が出土している（安楽2011）。

浦海遺跡

壱岐市勝本町本宮仲触字浦海に所在する。標高0～10mの岩石海岸に立地しており、満潮時には海面下に完全に水没する潮間帯遺跡である。1985年長崎県教育委員会により踏査され、長さ29.0cm、最大幅9.9cm、最大厚3.1cmの砂岩製の磨製石斧1点（図23）およびサヌカイト剥片が採集されている（長崎県教育委員会1994）。このような長大な磨製石斧の出土は、佐賀貝塚をはじめとする対馬島の遺跡との関連を想定させる。



図23 浦海遺跡出土遺物

松崎遺跡

壱岐市勝本町本宮南触字松崎地先海岸に所在する。標高1m未満の低地部に立地しており、満潮時には海面下に完全に水没する潮間帯遺跡である。1979年に勝本町教育委員会及び九州大学壱岐国研究会により範囲確認調査が行われ、2002年に勝本町教育委員会により発掘調査が行われた。遺構としては貝塚が発見されているが、堆積は旧河道内に限定されることから2次堆積した可能性が高い。貝層からは曾畑式土器および阿高式系土器を主体とする土器片が出土しており阿高式系土器の時期に最終的に形成されたものとみられる。

遺物としては土器、石器、ベンケイガイ製貝輪などが発見されている。土器型式は田村式（図24-1）、早期末条痕文土器、西之菌式、轟B式（図24-2）、西唐津式（図24-3）、曾畑式Ⅱ式（図24-4）、春日式（図24-5）、並木式（図24-6）、坂の下式（図24-7）、鐘崎式（図24-8）、北久根山式（図24-9）が確認されている。このうち曾畑式と阿高式系土器の出土量が多い。また、韓半島系土器として隆起文土器1点（図24-10）と水佳里Ⅰ式太線沈線文土器1点（図24-11）が出土している。石器は打製尖頭器、打製石鏃、サイドブレード、石錐、スクレイパー類、両面調整石器、磨製石斧、打製石斧、礫器、石錘、凹石、台石、敲石、石皿などが出土した。遺跡形成当時、河道の水が流れ

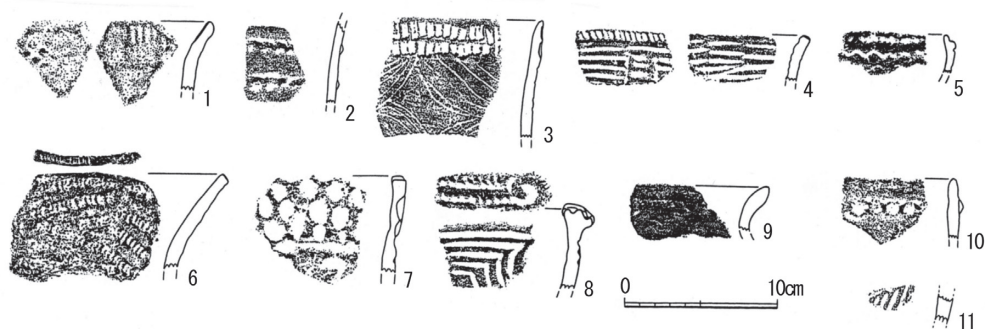


図24 松崎遺跡出土遺物

るような環境であったことから現在のような潮間帯ではなく、陸地であったと考えられている。また調査地区は遺跡本体から流失・廃棄により形成されたものとみられ、陸地側の山地裾部の傾斜変換点附近に遺跡の中心があったものと推定されている（田中編 2003）。

国柳遺跡（カラカミ遺跡国柳地区）

彦根市勝本町立石東触字国柳に所在する。深い湾入部を持つ片苗湾とそれに続く刈田院川流域の標高 52 ～ 70m の丘陵に立地し、弥生時代の集落遺跡として著名なカラカミ遺跡の西部にあたる。福田敏により黒曜石製細石刃核（図 25-1）、黒曜石製剥片鏃、黒曜石縦長剥片などが採集されている（安楽 1976, 正林・宮崎編 1985）。

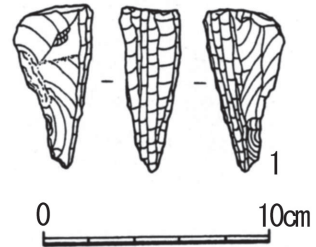


図 25 国柳遺跡出土遺物

彦根嶋分寺跡

彦根市芦辺町国分本村触に所在する。8 世紀後半から 11 世紀初頭まで官寺として機能していた遺跡である。2012 年度の彦根市教育委員会による発掘調査で細石刃核が出土した（註 2）。

御津ノ浜遺跡

彦根市郷ノ浦町大浦触に所在する。標高 0m の岩石海岸に立地しており、満潮時には海面下に完全に水没する潮間帯遺跡である。1985 年長崎県教育委員会により踏査され、縄文土器が採集されている（長崎県教育委員会 1994）。筆者は 2013 年踏査した際、黒曜石剥片（図 26）を採集している。

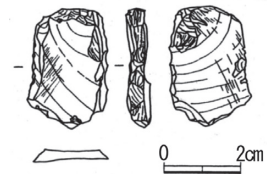
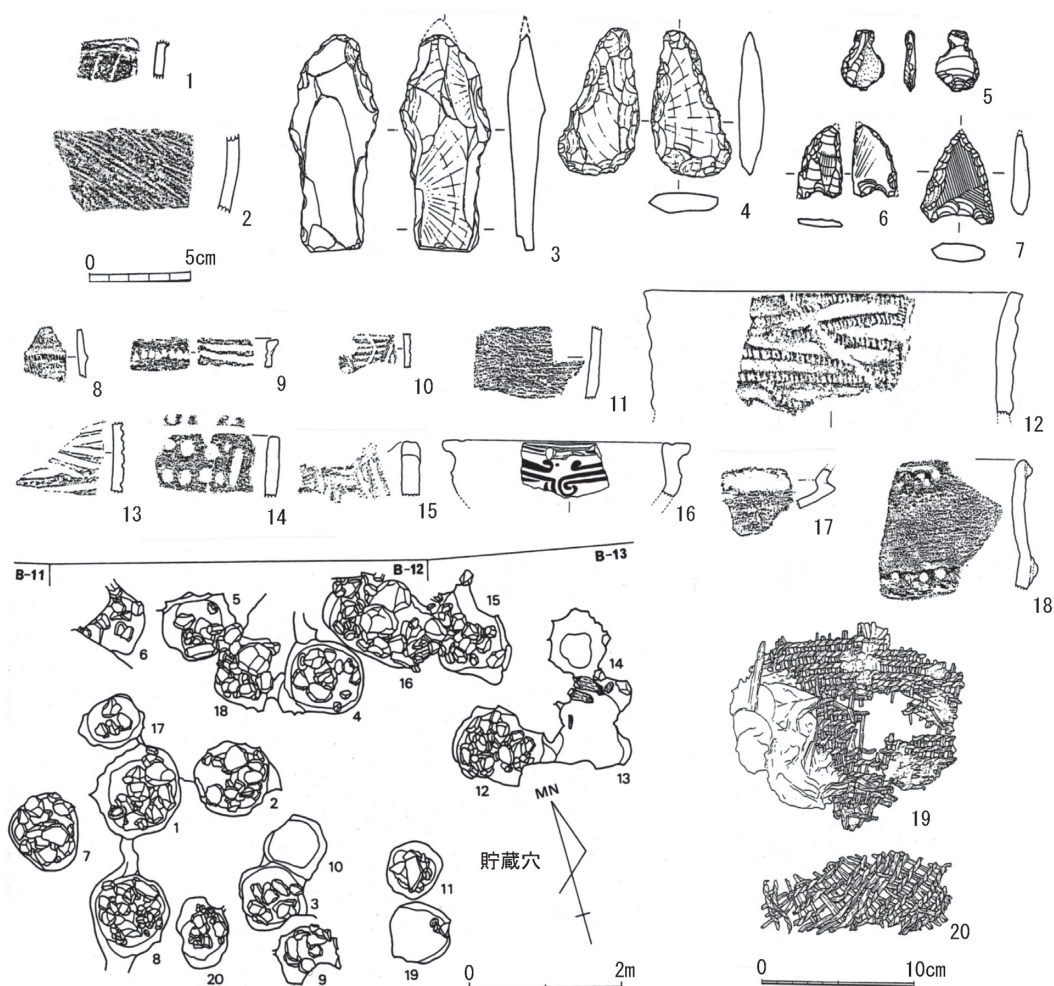


図 26 御津ノ浜遺跡出土遺物

鎌崎海岸遺跡・名切遺跡

鎌崎海岸遺跡は彦根市郷ノ浦町片原触字鎌崎に、名切遺跡は字名切山、字菓子田に所在する。弁天崎とよばれる小さな岬がありこの岬の南西海岸から名切川の河口一帯までに遺物が散布している。鎌崎海岸遺跡と名切遺跡の間には新田が開かれて断ち切られているが、本来は一体の遺跡であったと考えられている。両遺跡は高潮時には海中に没する潮間帯遺跡である。1977 年～ 1978 年に彦根郷土館が両遺跡の表面採集を行っている（横山・田中 1979）。また 1983 年に長崎県教育委員会により名切遺跡の発掘調査が行われている（安楽・藤田編 1985）。1977 年～ 1978 年の鎌崎海岸遺跡における地表調査では、出水式土器（図 27-1）や貝殻条痕土器（図 27-2）のほか石槍、打製石鏃、剥片鏃（図 27-6）、石銛（図 27-3）、スクレイパー、凹石、石皿、尖頭状礫石器、磨製石斧などの石器が採集されている。特に全体が直角三角形で底辺に当たる部分に刃部を有し、柄部が細長い定型化した特徴を持つスクレイパー（図 27-4）は鎌崎型スクレイパーと呼ばれる。また、



1～7:1977・78年鎌崎海岸採集, 8～20:1983年名切

図27 鎌崎海岸・名切遺跡出土遺物

1977年～1978年の名切遺跡における地表調査では、轟B式、曾畑式、轟D式、並木式、阿高式、坂の下式、小池原上層式、鐘崎式、北久根山式、黒川式などの土器のほか打製石鏃、局部磨製石鏃（図27-7）、つまみ形石器（図27-5）、磨製石斧が採集された。1983年の名切遺跡の調査では30基の貯蔵穴が確認された（図27）。この貯蔵穴は堅果類の貯蔵およびあく抜きのための施設と考えられている。貯蔵穴からは縄文時代中期の土器が出土する事例と晩期の土器が出土する事例があり、時期は縄文時代中期と晩期に属すると報告されている。出土土器には轟B式（図27-8）、曾畑式（図27-9,10）、轟D式（図27-11）、船元式、並木式（図27-12）、阿高式（図27-13）、坂の下式（図27-14）、中津式（図27-15）、鐘崎式（図27-16）、北久根山式、黒川式（図27-17）、刻目突帯文土器（図27-18）などが確認されている。石器としては縦長剥片、石鏃、剥片鏃、石錐、つまみ形石器、搔器、石核、彫器、石銚、鎌崎形スクレイパー、磨製石斧、打製石斧、磨石、凹石、敲石、石皿などがみ

られ、このほか 2 号貯蔵穴から、かご（図 27-19,20）と垂飾玉も出土している。名切遺跡では土器の出土が多く、鎌崎海岸遺跡では石器の出土が多いという指摘もある（横山 1990）。

馬立海岸遺跡

壱岐市郷ノ浦町坪触字小下シ、字小形に所在する。標高 0 ～ 5m の岩石海岸に立地しており、満潮時には海面下に完全に水没する潮間帯遺跡である。1985 年長崎県教育委員会により踏査され、石斧、石核など多数の石器が採集されている（長崎県教育委員会 1994）。筆者は 2013 年踏査した際、黒曜石剥片を採集している（図 28）。縦長の剥片がみられることから縄文時代後期頃の遺跡ではないかと推測される。遺跡南部には坪・初瀬流紋岩類が拡がり、流紋岩層中から黒曜石が産出されるため（竹下ほか 1987, 佐野 1995, 山内 2013）、黒曜石関連遺跡としての性格も想定される。

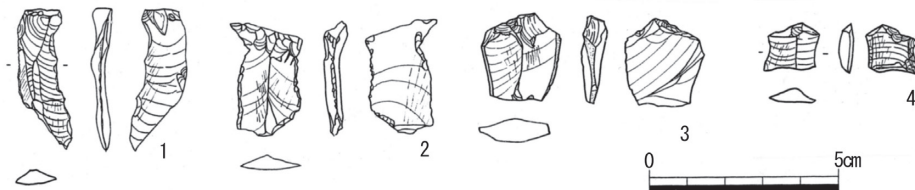


図 28 馬立海岸遺跡出土遺物

車出遺跡

壱岐市郷ノ浦町田中触に所在する。鉢形山の南側の田中川流域の平坦地とその南側の丘陵斜面に立地する。1998 年長崎県教育委員会により発掘調査された結果、細石刃 2 点と船底形細石刃核 1 点（図 29-1）と原礫面を残す円錐形細石刃核 1 点（図 29-2）が出土した（安楽 1998）。

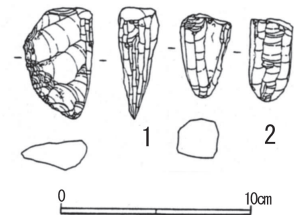


図 29 車出遺跡出土遺物

興触遺跡

壱岐市芦辺町湯岳興触に所在する。遺跡は島内最大の平野である深江田原平野の北西部外縁に位置し、平野に突き出た舌状台地とその周辺に広がっている。標高は 8 ～ 18m である。1975 年及び 1976 年に長崎県教育委員会が踏査した際、黒曜石製細石刃（図 30-1）と細石刃核（図 30-2）が採集されている（安楽 1976, 副島 1977）。1992 年に長崎県教育委員会が範囲確認調査を実施した際、縄文時代早期とみられる刺突文の施された口縁部片 1 点（図 30-3）と打製石器 1 点（図 30-4）が出土した（川口・松永 1998）。

原の辻遺跡

壱岐市芦辺町・石田町に所在する。深江田原とよばれる平野に広がる面積約 100 ha の広大な弥生時代の環濠集落遺跡で、標高 9 ～ 18 m の低い玄武岩台地を中心に、周囲の標高 5 ～ 7 m の低

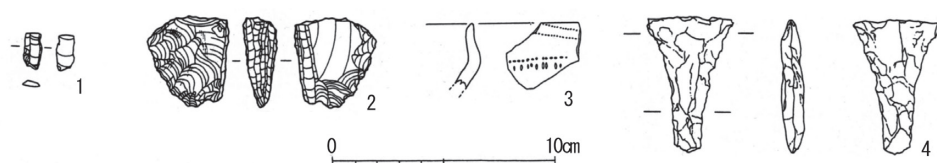


図 30 興触遺跡出土遺物

地部にも遺跡が分布する。原の辻遺跡では弥生時代・古墳時代初頭の遺物が多量に出土しているが、縄文時代の遺物も少量出土している。黒曜石製の細石刃（図 31-1）や細石刃核（図 31-2）が川原畑地区（宮崎編 1998）、不條地区（宮崎編 1998, 杉原編 1999, 安楽編 2000, 杉原編 2001, 寺田編 2006）、八反地区（安楽編 2002, 福田・小玉編 2004, 林編 2005）、高元地区（中尾編 2004）、原地区（安楽編 2000）、芦辺高原地区（山下・川口編 1997）、石田大原地区（河合編 2004）、大川地区（安楽 1976, 副島 1977, 宮崎編 1999）、原ノ久保A地区（宮崎編 1999）で 20 点以上出土している。西海技法によるものが大部分で縄文時代草創期の資料とみられる。これまで弥生時代以降の層から細石刃・細石刃核が出土していることが確認されていたが、2013 年度の川原畑地区の調査では、縄文時代の河川堆積層（未補正か ^{14}C 年代 6430 ± 40 年 BP）から細石刃が 1 点、中世層から細石刃核が 1 点出土した（古澤編 2014）。

縄文時代早期以降の遺物として確実に縄文時代のものと考えられる遺物として、坂の下式土器（図 31-3,4）3 点が不條地区で出土している（古澤・田中 2014）。石器としては山口麻太郎により原の辻遺跡またはカラカミ遺跡で採集された局部磨製石鏃や剥片鏃が以前より知られていた（下川 1970）。局部磨製石鏃（図 31-5）は不條地区（安楽編 2001）、八反地区（小石編 2001）、高元地区（中尾編 2005）、石田高原地区（副島・山下編 1995）、荳ノ木地区（安楽・藤田編 1978）、石田大原地区（河合編 2004）で 9 点出土している。剥片鏃（図 31-6）は不條地区（安楽編 2001）、石田高原地区（中尾編 2003）、石田大原地区（河合編 2002）、大川地区（藤田編 1977）、原ノ久保A地区（林編 2006）、原ノ久保B地区（松見編 2005）、池田大原地区（林編 2009）で 7 点出土している。石匙（図 31-7）は不條地区（寺田編 2006, 古澤・田中 2014）、八反地区（中尾編 2003, 川畑編 2011）、原地区（宮崎編 1999）、石田高原地区（中尾編 2003）、大川地区（安楽勉 2001）で 8 点出土している。楔形石器は不條地区（安楽勉 2000）で 1 点出土している。鎌崎型スクレイパー（図 31-8）は八反地区（福田・小玉編 2004）で 1 点出土している。このほか多くの打製石鏃や磨石・凹石・敲石、石皿など

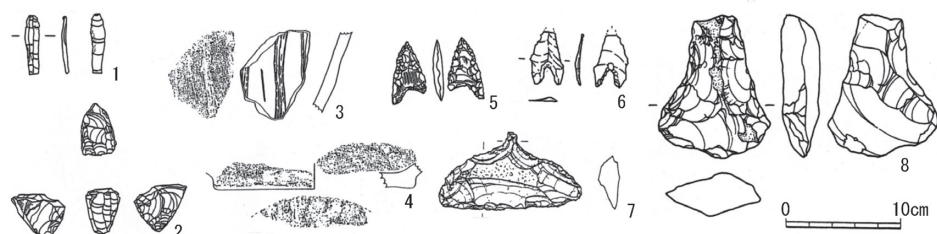


図 31 原の辻遺跡出土遺物

が出土しているが弥生時代のものと判別が困難である。

時期としては坂の下式土器、剥片鏃、基部のみを研磨する局部磨製石鏃、鎌崎型スクレイパーなどから縄文時代後期前葉を中心とする時期に土地が利用されたことが想定される。縄文時代の遺物は相対的に少量出土しているのが現状であるが、大規模な弥生時代以降の土地改変により縄文時代の層が煙滅している可能性や弥生時代の遺構より下層を調査しない事情による可能性もある。これまで出土した縄文時代遺物は石匙や石鏃などの石器が多く、原の辻遺跡周辺は一時的な野営地や狩猟場であった可能性が高いものと思われる（古澤・田中 2014）。

堂崎遺跡

壱岐市石田町筒城山崎触字堂崎に所在する。遺跡は標高 0～10m の砂浜海岸の岬部に立地する。1985 年安楽勉ら長崎県教育委員会により踏査され、2010 年川畑敏則と筆者により、2013 年筆者により踏査された。水田灌漑用の溜池を掘った上げ土（砂）から縄文時代後期末から晩期の屈曲部がある鉢（図 32-1）や貝殻粉を混和し貝殻条痕を施した粗製土器片（図 32-2,3）、黒曜石剥片などが採集されている。このほか焼成前穿孔の孔列土器が採集されているが、胎土や焼成から縄文時代の所産ではないと考えられる。溜池の岸には貝層がみられ貝塚の可能性もある（安楽・川畑・古澤 2014）。

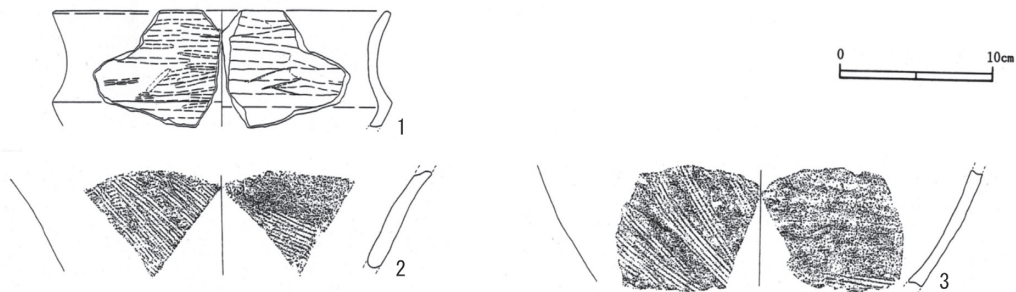


図 32 堂崎遺跡出土遺物

大久保遺跡

壱岐市石田町筒城東触字大久保に所在する。遺跡は大浜と筒城浜と呼ばれる砂性の海浜に挟まれた小山状の岬の基部に位置する。岬から西側に下った麓にあたり、北側は海に向かって急激に落ち込んでいる。岬の周辺には人頭大の礫が多くみられ、岩礫性と砂性の環境を併せ持つ。標高は 2～3m である。2001 年に熊本大学考古学研究室により発掘調査が行われた。貝層は砂層中にレンズ状に堆積していた。条痕調整が顕著な粗製土器（図 33-1～5）、「く」の字に屈曲する鉢胴部などが出土し（図 33-3,4）、胎土には貝殻粉を含むものも認められ、縄文時代後期末～晩期前葉の時期が考えられている。このほか打製石斧、石皿、骨角器が出土した（河合編 2002）。筆者が 2009 年～2013 年に踏査した際には、熊本大学調査時と同様の所見を持つ貝殻条痕調整土器（図 33-7）が露頭礫層を中心に発見され、中にはミガキ調整が顕著な土器（図 33-8）もみられた。露頭礫層の遺



図 33 大久保遺跡出土遺物

物は上部の砂層から落ち込んだものとみられるが、縄文時代後期末～晩期の土器のみがみられたため、砂層の堆積年代も同様の時期であることが確認された（古澤 2014a）。

中尾遺跡

壱岐市石田町池田東触字中尾に所在する。遺跡は印通寺港西部に位置する標高 6 ～ 30m の斜面に広がる。1996 年～ 1997 年に石田町教育委員会によって範囲確認調査が行われた。3m×4m のトレンチ VI 区から 130 点の石器が出土した。サヌカイト製スクレイパー、黒曜石製打製石鏃（図 34-1 ～ 3）、剥片、縦長剥片（図 34-5, 6）、つまみ形石器（図 34-4）などがみられる（河合 1998）。土器は確認されていないが、縦長剥片、つまみ形石器などから縄文時代後期の所産であると考えられる。遺跡北西部には久喜流紋岩類が拡がり、流紋岩層中から黒曜石が産出するため（竹下ほか 1987, 佐野 1995, 山内 2013）、黒曜石関連遺跡としての性格も想定される。

その他の遺跡

このほか 1985・1986 年、長崎県教育委員会により実施された分布調査（長崎県教育委員会 1994）により発見された縄文時代と考えられる遺跡がある。長崎県埋蔵文化財包蔵地カードに基づき表 2 のように整理したが、出土遺物のほとんどが黒曜石剥片などであり、縄文時代の遺跡ではない可能性もある。原島では縄文時代の遺跡としてこれまで池尻遺跡が 1 箇所知られるのみであった。2010 年川村明人が縄文土器の可能性のある有文土器を原島で採集したことがある。また、2013 年大童淳一郎により原島各所で黒曜石剥片などが採集されており、さらに多くの遺跡が所在するものとみられる。

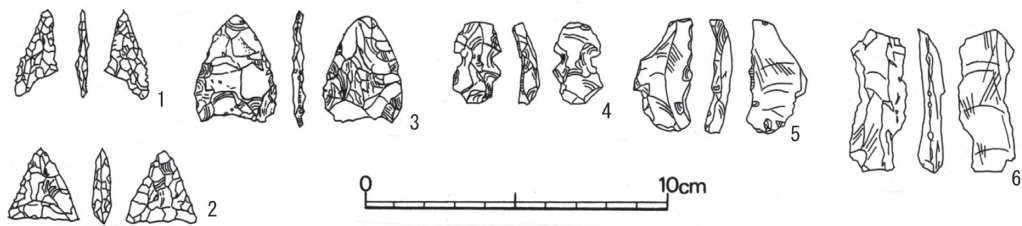


図 34 中尾遺跡出土遺物

(2) 壱岐島の縄文時代遺跡の特徴

これまで、壱岐島の縄文文化に特化した論究は少ないが、横山順、高野晋司、中尾篤志、川畑敏則らにより整理されている（横山 1990, 高野 1996b, 中尾 2001, 川畑 2008）。横山は壱岐島の縄文時代遺跡は西海岸の潮間帯に位置するものが多いと指摘している。縄文時代草創期の遺物は原の辻、興触、壱岐嶋分寺跡、前神田、国柳、車出、原といった内陸部で多く発見されている。一方、縄文時代早期以降の遺跡は浦海、松崎、大柳、浜、御津ノ浜、内野、鎌崎海岸・名切、馬立海岸といった西海岸の潮間帯を中心とする海岸部に多く、遺跡立地の変化がみられ、縄文時代早期以降、海での活動に依拠した遺跡が多く認められる。特に松崎や名切では間に土器型式がみられない段階があるが、押型文土器期や轟 B 式期から北久根山式期や夜臼式期までの土器が出土し、間歇的ではあるが長期間にわたり、土地が利用されている。遺跡によって量的な多寡に差異はあるものの、特に松崎、名切では曾畑式と坂の下式から北久根山式が、名切では並木式がまとまって出土している。これらの状況から、縄文時代前期後半と後期前葉から中葉に壱岐島での縄文人の活動の盛期があったものと考えられる。また、壱岐島の西海岸遺跡では馬立海岸のように黒曜石や黒曜石製石器が採集されるのみで土器がほとんど採集されない遺跡が多い。この土器量に比して石器量が多い遺跡があるという現象は偶然ではないものと思われ、発掘調査が実施された結果、黒曜石製石器のみが出土し、土器が出土しなかった中尾のような事例も確認されている。黒曜石製石器には剥片石器が多く認められることから、時期は縄文時代後期を中心とするものと考えられる。これらの遺跡附近には黒曜石産地もあり、黒曜石関連遺跡としての性格も想定される一方、土器の出土量が少なく黒曜

表 2 壱岐島の縄文時代遺跡

遺跡名	所在地	立地	標高	種別	出土遺物
大石	勝本町坂本触字大石	丘陵	10~25m	遺物包含地	石鏃, 黒曜石剥片
尾方	勝本町坂本触字尾方	丘陵傾斜面	4~10m	遺物包含地	黒曜石製石鏃, 剥片, サヌカイト製スクレイパー
水ノ元	勝本町坂本触字水ノ元	丘陵傾斜面	20~40m	遺物包含地	黒曜石製石鏃
前神田	勝本町新城西触字平川	平地	40~48m	遺物包含地	半船底形細石刃核, 縄文土器, 石鏃
大柳	勝本町立石西触字大柳	海岸	0~8m	遺物包含地	縄文土器, 磨製石斧, サヌカイト剥片
浜	郷ノ浦町里触字浜	砂浜	0~5m	遺物包含地	安山岩製スクレイパー
内野	郷ノ浦町半城本村触字内野	海岸	0~10m	遺物包含地	縄文土器
木ノ本	郷ノ浦町片原触字木ノ本	丘陵	90m	遺物包含地	黒曜石製石鏃2点, 黒曜石剥片
原	郷ノ浦町若松触字原	丘陵	130m	遺物包含地	船底形細石刃核, 黒曜石剥片
池尻	郷ノ浦町原島字池尻	丘陵	0~5m	遺物包含地	黒曜石剥片
貝畑	芦辺町箱崎本村触	丘陵	58m	遺物包含地	黒曜石剥片, 黒曜石原石
大左右	芦辺町箱崎大左右触字大左右	丘陵	5m	遺物包含地	黒曜石製石鏃, 剥片
津持	芦辺町箱崎大左右触字津持	丘陵斜面	20m	遺物包含地	黒曜石剥片
大谷第3	芦辺町国分本村触	丘陵	90m	遺物包含地	黒曜石原石
筒城浜	石田町筒城西触字花川	平地	5m	遺物包含地	黒曜石製スクレイパー
白水	石田町石田西触白水	台地	2~3m	遺物包含地	黒曜石原石, 剥片
椿	石田町池田東触字椿	平地	15~16m	遺物包含地	黒曜石原石, 剥片

石が多く出土する理由として縄文時代後期前半に小規模な野営地が多く営まれたという可能性を考えることができる。縄文時代早期以降の壱岐島内陸部の遺跡の様相が判然としないが、原の辻で発見された縄文時代遺物のうち大半は石器類で、石器類の中には剥片鏃があり、わずかに出土した縄文土器は3点とも坂の下式であることや、国柳でも剥片鏃が採集されていることから、やはり縄文時代後期前半に内陸部でも狩猟などの活動が行われていたものと考えられる。

一方、大久保や堂崎は数少ない東海岸の遺跡である。これらの遺跡では縄文時代後期末から晩期前半の貝殻条痕粗製土器が出土している。壱岐島の海岸は大部分が岩石海岸であるが、東海岸には砂浜海岸が発達し海岸砂丘もみられる（石井・鎌田 1965）。縄文時代後期以前の遺跡は岩石海岸の潮間帯に位置する事例が多いが、これとは対照的に縄文時代後期末から晩期前半の遺跡は大久保や堂崎のように東海岸の砂浜にも遺跡が立地するようになるという変化が認められる。甲元眞之は大久保の砂層堆積から縄文時代晩期初頭以降に砂丘が形成されたということを指摘している（甲元 2005）。また壱岐島の対岸にある九州島の唐津湾沿岸における砂堆を分析した田崎博之は縄文時代晩期前葉～中頃（黒川式）に海水準の下降と連動して砂丘が発達すると指摘している（田崎 2007）。壱岐島では以前の時期ではあまり利用されなかった砂丘でも黒川式期を前後する段階に大久保や堂崎のように土地利用がなされたものと考えられる。

3. 沖ノ島の縄文時代遺跡

(1) 遺跡概要

社務所前遺跡

沖ノ島の最南端部に位置し、北側を除く三方は急激な崖によって海に落ち込んでいる。北側は大小の岩石の路頭と樹木によって覆われた斜面で、北に伸びる尾根に続いている。この岸壁から北方に向かってゆるい傾斜がわずかに開けており、この平坦部に遺跡が立地する。標高は26～30mである。1954年宗像神社復興期成会によって行われた沖ノ島第1次第2回調査により発見され、1955年第1次第3回調査時に発掘調査された。この第1次調査時には縄文土器片約3700点、うち口縁部は約250個体が出土した。曾畑式、船元式、里木Ⅱ式（図36-6）、縄文時代中期末・後期初頭と考えられる土器などが出土した。石器としては石鏃、石匙、刃器類、磨製石斧、玦状耳飾、石錘、凹石などが出土した（原田・渡辺 1958）。1970年沖ノ島第3次学術調査時にも発掘調査された。西側調査区Ⅱ層が縄文時代前・中期の遺物包含層であり、南側調査区Ⅳ層が縄文時代晩期の包含層である。土器は曾畑式（図36-1～3）、船元式（図36-4,5）、黒川式（図36-7～9）などが出土した。石器は石鏃、石銚、石錘、石匙、スクレーパー、使用痕のある剥片、彫器、敲石、凹石、磨石、石錘等が出土した（橘・前川・黒野 1979a）。

4 号洞穴遺跡

沖津宮の北側にあたる巨岩の下に位置し、2つの巨岩が転落して重なり合って洞穴状になってい

る。1970年沖ノ島第3次学術調査時に縄文時代前期土器（図37-1,2）、曾畑式、船元式（図37-3,4）、黒川式（図37-5）などが出土している。石器は石鏃、石匙、スクレーパー、剥片石器、磨製石斧、球状耳飾、敲石などが、骨角器は釣針、貝製装身具などが出土している（橘・前川・黒野 1979a）。

大麻畑遺跡

社務所前遺跡より北西約250mのところに狭い平坦面があり、湧水もみられる。1969年の調査時に蛇紋岩製磨製石斧（図38-2）と黒曜石製刃器（図38-1）が採集されている（橘・前川・黒野 1979a）。

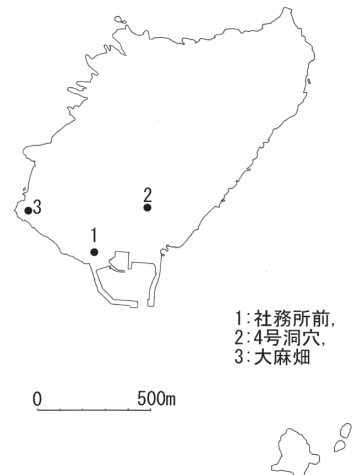


図35 沖ノ島における縄文時代遺跡

(2) 沖ノ島の縄文時代遺跡の特徴

社務所前は沖ノ島における居住の中心的な役割を果たしていたと推定される。一方、4号洞穴は遺物の出土量から少人数が短期間断続的に生活の場として利用していたと推定されている。生業としては海洋資源とりわけ海棲哺乳類への依存度が高いほか、多量に出土している敲石類から根茎植物などの植物資源への依存も想定されている。黒曜石石材についての肉眼観察からは縄文時代前期は西九州との関連が強く、縄文時代中期には周防灘・瀬戸内との強い関係がみられ縄文時代晩期は西北九州と密接な関係を持つように地域間関係が変化したと指摘されている一方、土器では北部九州、特に遠賀川周辺の土器とほぼ同一であることが指摘されている（橘・前川・黒野 1979b）。橘昌信は縄文時代前期と中期の石器を弁別することは不可能であると述べており、縄文時代前期・中

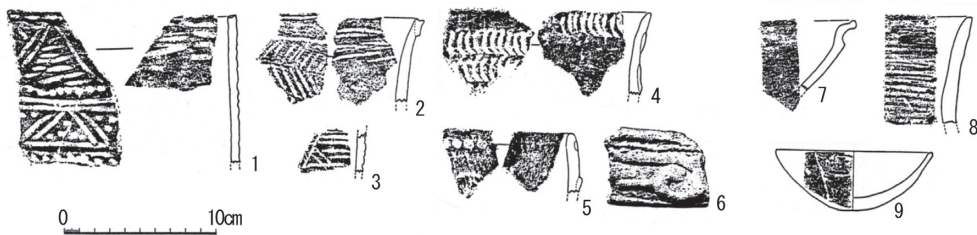


図36 社務所前遺跡出土遺物

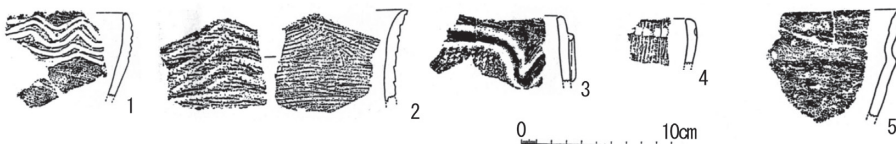


図37 4号洞穴遺跡出土遺物

期の石材供給地の変遷は、中期の土器に阿高式系土器が認められず、瀬戸内系の船元式がみられることから推定されたものである。当時は阿高式と船元式が同時期に九州島の東西に分布すると考えられていたことがこの推定の背景にある。現在では船元式は五島列島など西北九州でも安定して発見されており、船元式が強いて東九州のものと考えられないため、前川威洋の北部九州の土器とほぼ同一であるとする指摘のほ

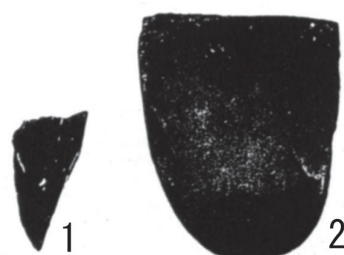


図 38 大麻畑遺跡出土遺物

うが実態に近いのではないかと思われ、縄文時代前期から中期にかけて腰岳、星鹿半島、佐世保市東浜といった西北九州産と周防灘の姫島産の黒曜石の両者がみられると考えておくのが穏当であろう。ただし、沖ノ島で里木式が出土していることは注意され、周防灘や瀬戸内地域との関係性も無視することはできない。

Ⅲ．玄界灘島嶼域の縄文土器の特徴

対馬島、壱岐島、沖ノ島の縄文土器は縄文時代全時期を通して常に北部九州と同様の土器変遷を示しており、島嶼部独自の土器様式が形成されたことは基本的でない。そもそも、土器様式の形成には集団による規制が強く影響しており、土器様式の伝播・流布には集団の影響力が大きく関わっている。先に確認したとおり、対馬島、壱岐島、沖ノ島では縄文時代全般を通して、遺跡自体は確認されるものの、小規模な野営地的性格を持つ遺跡も多く、拠点となる遺跡は非常に少ない。集団規模が九州本島の遺跡より上回ったり、同等であると看做される遺跡は確認されていない。

玄界灘島嶼部の土器が如何に北部九州と同様の土器様式を保持しようとしたかということを端的に表す事例が滑石混和土器の様相である（表3）。西彼杵半島をはじめとする九州西北部で産出する滑石は、対馬島・壱岐島・沖ノ島では産出しない。従って、滑石混和土器の出土は、土器が九州本島から持ち込まれたか、原料となる滑石を九州本島から搬入しているものと考えられる。このように滑石は遠隔地石材としての性格を有している（川道 2013）。九州の縄文土器の中で滑石を混入する土器として曽畑式と並木式および阿高式系を挙げることができる。

曽畑式については滑石混和土器と滑石非混和土器の両者が対馬島、壱岐島、沖ノ島で出土している。対馬島の夫婦石では滑石混和土器と滑石非混和土器の比率は拮抗している。壱岐島の松崎でも滑石混和が優勢である。名切では滑石非混和土器が優勢であるが、本来滑石が混和されることの少ない遅い段階の曽畑式が多く出土していることを反映している。沖ノ島については数値化できないが滑石が混和された土器は極少量であると記述されている。

並木式については対馬島、壱岐島ともに滑石混和土器が優勢である。阿高式、阿高式系では壱岐島では滑石混和土器が優勢であるが、対馬島では佐賀のように滑石混和土器が優勢である遺跡と吉田やヌカシのように滑石非混和土器が優勢である遺跡がある。滑石産地から離れるにつれ、滑石を混和する比率が低くなっている可能性がある。

このように西北九州では滑石を混和することが多い曽畑式、並木式、阿高式系について、玄界灘島嶼部では滑石が混和されるものと滑石が混和されないものがあり、滑石が混和されるものが優勢である遺跡も少数ではない。このことは、土器本体や滑石を搬入してでも、北部九州の土器様式を保持しようとする意識の発露であると考えられる。また、滑石を混和しない曽畑式土器の中には金雲母が混和されているものが認められたり、滑石を混和しない阿高式系土器であっても赤褐色に発色するものが多くみられ、滑石を混和できなくても、同様の質感・色調を志向したものと考えることができる。このような滑石非混和土器が一定程度存在することは、在地でもこれらの土器を製作していた可能性が高いことを示す。

玄界灘島嶼部として特徴を示す土器の要素としては志多留、佐賀、ヌカシⅡ層上部などにみられる鐘崎式期・北久根山式期の貝殻粉混和粗製土器や大久保や堂崎にみられる縄文時代後期末から晩期の貝殻粉混和粗製土器が挙げられる。三万田式期の様相が不明なので縄文時代後期中葉と後期末～晩期の貝殻粉混和土器が系譜関係にあるかはわからない。このうち田中聡一は縄文時代後期末～晩期初頭の土器について「九州本土のものとは異質な土器」とみて、壱岐島および対馬島では何らかの理由で九州本土と疎遠な関係となり、個性の強い文化が形成されたと指摘している（田中2009a）。貝殻粉混和土器は本土部でありあまりみることのない土器で、島嶼部の独自色を示しているものと思われる（註3）。しかし、鉢の形態などは大久保や堂崎で示されるように九州本島の土器と同様であり、独自の土器様式として設定するほど、九州本島の土器と異なるものではない。島嶼部のみの独自の土器様式が存在しないということは、島嶼部の集団が土器様式を独自に形成するような影響力を持たない程度の規模の集団であったことを裏付ける。島嶼部であれば、必ず独自の土器様式を持たないわけではない。例えば、済州島の新石器時代土器は、基本的に韓半島南海岸の土器様式と同一の歩調をとって変遷していくものの、観察すれば、それは済州島の土器であると明確に

表3 玄界灘島嶼域における滑石混和土器

型式	島嶼	遺跡	滑石混和				滑石非混和			
			口縁部	胴部	底部	計	口縁部	胴部	底部	計
曽畑式	対馬島	越高尾崎					1	3		
		夫婦石	2	14		16	1	12		13
	壱岐島	松崎	40	11	2	53	27	2		29
		名切	3	9		12	1	6	7	14
並木式	対馬島	佐賀	1			1				
		串山ミルメ浦		2		2				
	壱岐島	松崎	19	11		30		1		1
		名切	13	18		31				
阿高式・坂の下式	対馬島	夫婦石		4		4				
		吉田	2	8	2	12	8	26	4	38
		佐賀	20	5	2	27	17	1	1	19
		ヌカシⅡ層		28	1	29	12	275	6	293
		ヌカシⅢ層	11	119	5	135	13	239	14	266
		ヌカシⅣ層	7	36	6	49	3	137	7	147
		多田越		1		1	3	11	3	17
	壱岐島	松崎	40	5	12	57	2		3	5
		名切	17	24	9	50				
		原の辻		2	1	3				

認識できるほどの差異があり、独自の土器様式を持ちえている。従って対馬島や壱岐島は島嶼であるから独自の土器様式を持ち得なかったのではなく、集団の規模、性格、また本土との距離や交流頻度などの集団の諸条件によって独自の土器様式を持ちえなかったものと考えられる（註4）。

IV．玄界灘島嶼域における縄文時代遺跡の変遷と韓半島南部における縄文系土器

以上で概観した対馬島、壱岐島、沖ノ島の縄文時代遺跡の概要と変遷について整理したものが表4である。それぞれの島で特有の遺跡変遷がみられるが、共通する面も多い。対馬島と壱岐島では縄文時代早期の押型文土器段階以降、縄文時代遺跡がみられるが、対馬島でも壱岐島でも西海岸に多く遺跡が分布し、大きな河川の流域ではなく、小さな湾奥の岩礁性海岸付近の平坦地に遺跡が立地するのが特徴である。また、西海岸に立地するとはいえ、ほぼ北西風を避けることのできる立地であることも注意される。基本的に小規模な遺跡が多く、拠点集落とみられるのは、遺物量、竪穴建物跡（佐賀）、貯蔵穴（名切）（註5）などから判断して、対馬島の佐賀、志多留、壱岐島の松崎、名切程度であろう。

時期別でみると曾畑式期に対馬島の夫婦石など、壱岐島の松崎、鎌崎海岸・名切など、沖ノ島の社務所前、4号洞穴といったように遺跡数が増加し、また土器も安定した出土量がみられる。後期初頭・前葉の坂の下式期には遺跡数が再度、増加するが、石器の出土が多く、土器の出土量が少ない小規模な遺跡も多い。この時期に西北九州全体で遺跡数が増加していることは既に福田一志が指摘している。福田は坂の下式期に多くの集落が存在したのではなく、本拠地となる集落は数少なく、本拠地の周りに小さなワークサイトが形成されたことが遺跡数に反映していると分析している（福田1999）が、この指摘は対馬島や壱岐島でもあてはまるものと思われる。中尾篤志は西北九州における漁撈具の変遷について整理しているが、縄文時代中期後葉～後期前葉に黒曜石製鋸歯尖頭器

表4 玄界灘島嶼域における遺跡の時期

韓半島南部土器編年 九州北部土器編年	隆起文		瀬仙洞	曾畑	水佳里Ⅰ 船元/春日	水佳里Ⅱ 並木	阿高	水佳里Ⅲ				刻目突帯文	孔列	休岩里
	早期	ⅡB	西唐津					坂の下	鎌崎	北久根山	太郎泊	三万田	御領	黒川
対馬島	泉							○?	●	●	●			●
	志多留													
	越高	▲	▲	●	●									
	越高尾崎	▲○	▲○	●	●									
	向渠	○												
	夫婦石		△	▲	●△	▲	▲○		●					●△
	井手							○?						
	高松ノ塚							●△	●	●				●
	吉田				△	○	●							●
	佐賀								●	●				●
	住吉平							●△		●				●
	ヌカシ		△					●△		●				
	多田越							●						
	西加藤	○			○△?			●						
壱岐島	貝口赤崎													○
	皇后崎								□?					
	住吉橋下				○									
	串山ミルメ浦					●								○
	松崎	●	●△	●	●	●△	●	●	●	●				
	国福								□?					
	鎌崎海岸							●						
	名切		●		●	●	○	●	●	●			●	●
	馬立海岸								□?					
	鹿野	○						○						
沖ノ島	原の辻												●	
	堂崎												●	
	大久保												●	
	中尾								□?					
沖ノ島	社務所前			●	●									●
	4号洞穴			●	●									●

●：安定した量の縄文土器

○：少量の縄文土器

▲：安定した量の韓半島系土器

△：少量の韓半島系土器

□：土器未確認

や石鋸および石銚などの刺突具が増加し、単式釣針もみられるという変化が認められることが指摘している（中尾 2009）。海での活動の活発化を想定することができる段階である。続く、鐘崎式期から太郎迫式期には佐賀に代表されるように対馬島や壱岐島でも遺跡が認められる。しかし、三万田式期には、玄界灘島嶼域では遺跡がほとんど確認されない。福田は西北九州の島嶼部で該期に遺跡数が減少することを指摘しているが（福田 1999）、玄界灘島嶼域はまさにこの状況があてはまる。黒川式期に再び遺跡がみられるようになるが、黒川式期以降の遺跡は対馬島や壱岐島ではそれまでの縄文時代遺跡の立地とは異なるという変化がみられる。

以上のような玄界灘島嶼域における遺跡数の消長と立地の変遷は日韓交流上、影響関係があったのであろうか。既に、対馬島での縄文時代遺跡の消長と韓半島との交流の活発さが対応するということを、田中聡一が指摘している（田中 2013）。

日韓交流における韓半島側の拠点である東三洞（Sample1974, 尹武炳・任鶴鐘・呉世筵 2004a, b, 2005, 河仁秀 2007, 岡田・河仁秀 2009）で出土した縄文土器の個体数について整理したものが表 5 である。東三洞以外では安島（趙現鐘・梁成赫・尹温植 2009）で苦浜式、轟 A 式、型式不明縄文系土器（註 6）、大浦（李憲宗・河仁秀・김영훈 2004）で轟 B 式、煙台島（韓永熙・任鶴鐘 1993）で轟 B 式、春日式、黄城洞（최은아 외 2012）で曾畑 I 式、欲知島（韓永熙・任鶴鐘・権相烈 1989）で船元式、新岩里（鄭澄元 外 1989）で坂の下式、上老大島上里（孫寶基 1982）で坂の下式、中津 II 式が出土している。これまでも指摘されてきたように東三洞をはじめとする韓半島南海岸で出土する縄文土器の大半は坂の下式が占める（宮本 2004, 林尚澤 2008, 田中 2009b）。このことは、玄界灘島嶼域で坂の下式期（註 7）に海での活動の活発化に伴い遺跡数が増加していることと関係があるものと思われる（田中・古澤 2013）。また、坂の下式以外では轟 B 式や曾畑式の出土が目立つが、これも対馬島、壱岐島、沖ノ島といった玄界灘島嶼域で安定した出土量が認められる土器型式である。一方、船元式、春日式や里木式も東三洞、煙台島、欲知島で出土しているものの数量は多くなく、これは玄界灘島嶼域で該期の遺跡が多くない様相を反映しているものと考えられる。このように縄文時代早期から縄文時代後期前葉までの東三洞をはじめとする韓半島南海岸における縄文土器型式の内訳は、玄界灘島嶼域の遺跡の消長に対応しており、如何に玄界灘島嶼域が縄文時代後期前葉まで日韓交流の上で大きな役割を果たしたかを予測することができる。

表 5 東三洞貝塚出土縄文系土器

東三洞	口縁部	胴部	底部	計
轟B式	1	3		4
曾畑式		4		4
船元Ⅱ式	1			1
里木式	1			1
坂の下式 (うち阿高式系)	18 (1)	10 (6)	6 (3)	34 (10)
鐘崎～三万田	1			1
北久根山	1	1		2
三万田?		1		1
不明		2		2

ただし、縄文時代後期中葉に対馬島などで拠点的な比較的規模の大きな遺跡が形成されるにも関わらず、東三洞で該期の縄文土器の出土が目立たないことは、既に日韓交流の低調化が開始しているものと考えられる（古澤 2013b）。なお、これまでの調査成果では三万田式期以降の縄文系土器はほとんど韓半島南部では発見されていないが、近年、昌原市馬山合浦区網谷里の環濠内で内

湾口縁甕、口唇刻目甕、赤色磨研壺とともに夜臼式系土器が出土した（柳昌煥 編 2009）。遺跡は鎮海湾の支湾である鎮東湾に注ぐ鎮東川を遡った狭隘な平野に所在し、九州と韓半島南部内陸を結ぶ交通の要衝にある。この夜臼式系土器は端野晋平が指摘したとおり（端野 2010）、底部形態や胎土などが北部九州のものとは異なり模倣品である。

後述のとおり韓半島との交流で中心的な役割を果たした対馬島と、韓半島との交流の痕跡が希薄な壱岐島、沖ノ島の遺跡の消長はほぼ対応していることから、対馬島における遺跡の消長は韓半島との交流によるものではなく、縄文集団側の事情によるものが基本であることも推察させる。

それでは、玄界灘島嶼域における韓半島からの影響について次に検討したい。

V．土器からみた玄界灘島嶼域の縄文時代日韓交流の変遷

1. 時期別変遷

(1) 縄文時代早期

越高尾崎VI層では貝殻条痕土器が、越高では前平式土器が出土しており、これに伴う韓半島新石器時代土器は、隆起文土器である可能性が高い。

(2) 縄文時代前期前葉（轟B式期）

この時期の遺跡としては隆起文土器が出土する越高（図 5-1 ～ 6）、越高尾崎（図 5-8 ～ 13, 15, 20 ～ 23）、夫婦石（図 6-14）が挙げられる。越高や越高尾崎は出土した過半の土器が韓半島系の土器であるという特異な遺跡であり、韓半島からの渡航集団が居住した結果であると考えられる。越高で採集された隆起文土器の胎土分析から対馬島在地で隆起文土器を製作された可能性が提起されており、越高では隆起文土器の全てではないにせよ、韓半島南部から渡海した集団が一定期間居住し、土器の製作を行っていたと推測されている（鐘ヶ江・三辻 2004）。また、越高・越高尾崎は一時的滞在が繰り返された遺跡とみる見解（木村 2003）や小規模な野営地的な遺跡であるという見解もある（大貫 2013）。

一方、壱岐島では松崎で多くの縄文土器とともに隆起文土器（図 24-10）が 1 点確認されている。

(3) 縄文時代前期中葉（西唐津式期）

韓半島新石器時代土器が出土した事例としてはヌカシ（図 15-2）や夫婦石の事例が挙げられる。夫婦石では押引横走魚骨文、斜格子文（図 6-11）、沈線文（図 6-7）、押点文（図 6-1, 20）、粘土痕＋沈線文（図 6-15, 16, 19）などの多様な瀛仙洞式土器の文様がみられ、器種としては深鉢、鉢・碗類のほか壺（図 6-21）も確認されており、文様上も器種組成上も瀛仙洞式土器の全般的なセットが出土しているものと把握される。また、瀛仙洞式の初期段階の土器（図 6-17）も出土し、隆起文土器期と瀛仙洞式土器期の移行期にも間断なく対馬島で交流が行われたことを示す。この段階の夫婦石の土器組成は過半が韓半島系土器で越高・越高尾崎と同様に韓半島からの渡航集団の居住地とし

て利用されたものと考えられる。対馬島で確認される瀛仙洞式土器は全て搬入品である。

(4) 縄文時代前期後葉（曾畑式期）

韓半島系土器としては、夫婦石や佐賀貝塚で水佳里Ⅰ式初葉土器の搬入品が出土している（図 6-8,12-1）。調査面積があまりに狭小であるため判然としないが、夫婦石では曾畑Ⅱ式と水佳里Ⅰ式初葉土器の出土地点がやや異なり、同一遺跡内での棲み分けがなされた可能性もある。

(5) 縄文時代中期（船元式期～阿高式期）

西加藤では韓半島系土器が出土しているという情報（永留 1975）もあるが詳細は不明である。夫婦石で多量の水佳里Ⅰ式（図 6-2,3,18,22）、水佳里Ⅱ式（図 6-4）が認められる。夫婦石ではこれらの時期に対応する縄文土器は少量で、韓半島の搬入品が多量に出土するこの時期の夫婦石は特殊な役割を担った集落である可能性がある。

一方、壱岐島では松崎で多くの縄文土器とともに韓半島系の太線沈線文土器（図 24-11）が 1 点確認されている。

(6) 縄文時代後期前葉（坂の下式期）

吉田（図 10-13～17）やヌカシⅡ層（図 15-7,8）などで坂の下式土器と共に水佳里Ⅲ期の二重口縁土器や把手附土器などの搬入品がある程度まとまって出土する。吉田やヌカシは調査面積が狭小で、出土土器資料も細片が大部分であるにもかかわらず、一定の比率で韓半島新石器時代土器が出土している。一方、先述のとおり韓半島南部出土縄文系土器の中で坂の下式が最も数量が多く、そのため双方向的に活発な交流があったと考えられる。但し、吉田やヌカシでは縄文土器も出土し、客体的に韓半島土器が出土しており、前段階の夫婦石で圧倒的な量の水佳里Ⅰ・Ⅱ式が出土する様相とは異なり、交流の形態が変化したものと考えられる。

(7) 縄文時代後期中葉（鐘崎式～太郎迫式期）

佐賀、志多留、夫婦石、ヌカシⅡ層上部などで鐘崎式、北久根山式が多量に出土し、拠点となる集落が形成されているにもかかわらず、韓半島新石器時代土器は確認されない。東三洞で北久根山式土器が出土し、佐賀でキバノロ上顎犬歯製垂飾（図 12-7）が出土することから交流が絶無になっただけではないが、前段階と比較した場合、日韓交流の低調化を指摘することができる（古澤 2013b）。

(8) 縄文時代後期後葉（三万田式期）

この時期の玄界灘島嶼域の様相は不明である。これまでのところ対馬島、壱岐島、沖ノ島では三万田式土器が 1 点も出土していない。このため、日韓交流の様相も不明である。

（9）縄文時代後期末～晩期後半（御領式期～黒川式期）

この時期の玄界灘島嶼域では対馬島の泉、壱岐島の名切、堂崎、大久保、沖ノ島の社務所前、4号洞穴などの遺跡がみられる。三万田式期の空白期から再び、島嶼部での活動がみられる時期であるが、これらの遺跡のうち、韓半島との関係を考えることができるのは対馬島でも最も韓半島に近い位置に立地する泉の箱式石棺で、内部から合口甕棺と思われる土器片（図 3-1）と碧玉製管玉 1 点（図 3-2）が出土している。この遺跡の評価は非常に難しいが、この箱式石棺が黒川式期のものであったとすれば、韓半島との交流があったものと考えられるがやや例外的な事例である。しかし、そのほかの遺跡では韓半島系の遺構・遺物はこれまでのところ確認されていない。また、孔列土器は対馬島の井手で 1 点出土しているが（図 8-4）、出土した層からは突帯文系統の甕・壺、如意形口縁、赤色磨研土器、甕の口縁下に附着する把手といった韓半島系土器が出土しており、さらに無遺物層を挟み、下層からは 1 点板付Ⅱ式壺が出土していることから、層の堆積自体は板付Ⅱ式以降であると判断されるので、主体的に出土する土器から夜臼式に伴う可能性が高いものの井手遺跡の孔列土器の時期を判断するのは困難である。これまでのところ井手では黒川式は出土していない。片岡宏二は井手の孔列土器を第 3 類として分類しているが、韓半島からの搬入品の可能性が高いとしている（片岡 1999）。筆者は、井手の孔列土器が黒川式期ではなく夜臼式期のものであれば、九州本島からの影響も排除することができないものと考えている。

（10）弥生時代早期（夜臼式期）

夜臼式期の対馬島・壱岐島の遺跡として井手、吉田、住吉平、貝口赤崎、串山ミルメ浦、名切などが挙げられる。このうち韓半島系土器としては井手で頸部縦磨研の赤色磨研土器（図 8-5）、甕の口縁下に附着する瘤状の把手（図 8-6）、口唇刻目内湾口縁甕（図 8-12）、壺（図 8-13）が出土している。このほか、（伝）対馬市美津島町雞知出土磨研壺（福岡県文化会館 1978）も韓半島系である可能性が高い。（伝）雞知出土壺は高さ 17.7cm の壺で縦方向のミガキ調整が施され（註 8）、底部は上げ底となっている（図 39）。赤色ではないとされることもあるが、部分的に赤色が観察される。沈奉謹は大坪里住居跡出土例を類例に求めており（沈奉謹 1979）、小田富士雄は日本列島産としながらも韓半島と共通の特徴を有することを指摘している（小田 1986）（註 9）。これらのことから対馬島を中心に日韓間の土器文化の交流自体は存在したことが明らかなである。しかし、縄文時代後期前葉までの遺跡では対馬島ではかなり多くの頻度で韓半島系土器が出土していた状況と比較すると圧倒的に韓半島系土器が出土する頻度は低下している。特に縄文時代前期における越高・越高尾崎、夫婦石や縄文時代中期の夫婦石のように出土土器の過半が韓半島系土器で占められる遺跡は夜臼式期には確認されていない。

2. 玄界灘島嶼域における韓半島系土器の様相

玄界灘島嶼域では韓半島系土器が出土するが、遺跡内の同時期土器の中で過半を占める程度韓半

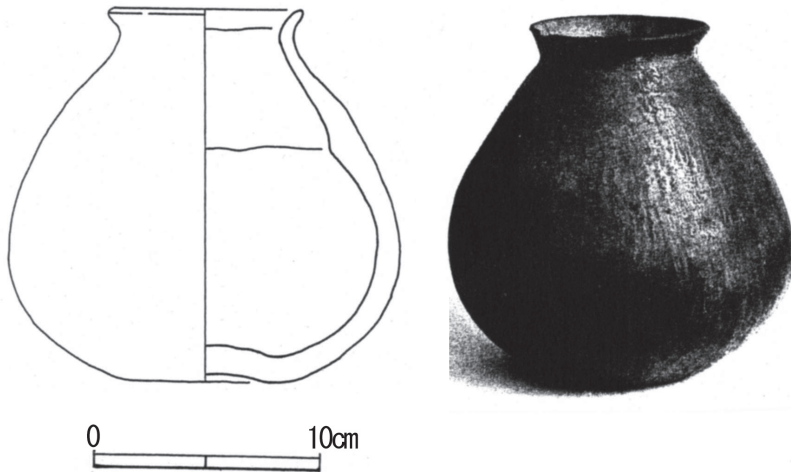


図 39 (伝) 雞知出土磨研壺

島系土器が出土するのは対馬島のみである。壱岐島でも韓半島系土器が松崎で出土しているが、客体的な存在である。韓半島系土器が主体を占める時期は縄文時代早期・前期前葉の越高・越高尾崎、縄文時代前期中葉の夫婦石、縄文時代中期の夫婦石であり、これらの遺跡は韓半島からの渡航集団の居住地である。このように縄文時代早期から中期まで間断はあるもののおおむね対馬島を中心とした交流を窺うことができる。

縄文時代後期初頭・前葉の対馬島では吉田やヌカシのように韓半島系土器が出土する遺跡があるが、過半を占めることはない。しかし、これらの遺跡では小規模集落であったためか、土器の遺存状況が悪く、点数も少ない中、一定程度の比率で韓半島系土器が出土しており、一概に交流拠点が韓半島南部に移ったとは考えられず、依然、日韓交流の拠点として対馬島は重要な位置を占めていたものと思われる。

縄文時代後期中葉から晩期後半頃まで玄界灘島嶼域ではほとんど韓半島系土器がみられない。特に縄文時代後期中葉には比較的大規模な遺跡が認められるにも関わらず韓半島系土器はみられないことは重要である。

弥生時代早期になり再び韓半島系土器が井手などで確認されるが、韓半島系土器が出土する頻度は低下し、まとまった量の土器が出土していても韓半島系土器が出土しない遺跡も多い。

このような韓半島系土器からの変遷からは特に縄文時代早期から中期までは韓半島の集団の拠点が構築されるほど、対馬島は日韓交流で重要な位置を占めていた。後期前葉でも双方向的な交流の下、対馬島は交流の拠点であったが、その後、対馬島の日韓交流上の重要性は相対的に低下する。縄文時代晩期後半・弥生時代早期に至っても、地理的位置に比してそれほど多くの韓半島系土器はみられず、縄文時代早期から後期前葉までの水準の重要性は回復することはなかった。

VI. 日韓交流における玄界灘島嶼域と九州本島との関係の変遷

1. 縄文時代早期～後期前葉の様相

縄文時代早期から縄文時代前期前葉（轟 B 式期）にかけての時期で玄界灘島嶼域以外で出土した韓半島隆起文土器は五島列島の頭ヶ島白浜（古門ほか 1996）出土赤彩沈線文土器搬入品 1 点（図 40-1）のみである。この時期の対馬島では韓半島の隆起文土器集団の居住遺跡が認められる。隆起文土器の集団は対馬島を最終目的地とし、対馬島を中心に交流を行っていたものと考えられる。壱岐島や五島といった対馬島以外の島嶼で確認されている隆起文土器は対馬島を介した交流の結果であると筆者はみている。

縄文時代前期中葉には九州島で西唐津式が成立する。この西唐津式の横走魚骨文、刺突文、斜格子文を含む沈線文と押点文の複合文といった碗・鉢または深鉢にみられる文様は韓半島の瀛仙洞式と強い影響関係がある（水ノ江 1988, 李相均 1998 ほか）。しかし、対馬島の夫婦石でみられるように西唐津式に影響を与えた押引横走魚骨文や斜格子文・押点複合文が施文された深鉢や碗・鉢類のみが単体で搬入されたのではなく、瀛仙洞式の器種組成全般・多種多様な文様を持つ土器がまとめて搬入されており、瀛仙洞式土器の全体像は西北九州の集団にも把握できた可能性が高いにもかかわらず、西唐津式の中で瀛仙洞式と共通する要素は、深鉢または碗・鉢類の中の一部の文様のみで、その他の文様、器種組成、胎土、器面調整においては西唐津式と瀛仙洞式は全て異なっている。このため、西唐津式土器を製作した集団は、韓半島南部の土器の要素を全て受け入れるのではなく主体的に選択し、採用したものとみられる（古澤 2013a）。夫婦石やヌカシなどの様相から対馬島までは韓半島からの渡航集団が渡航していることは確実であるが、この段階の九州島で瀛仙洞式の搬入土器はこれまでのところ確認されていない。選択的ではあるが深鉢や碗・鉢類に一部の文様を韓半島南部から採用したということは、九州の縄文土器製作史の中では非常に稀有な状況であり、先述のとおり、玄界灘島嶼域では独自の土器様式を持たない程度の集団の痕跡しか確認されていないので、韓半島からの渡航集団は対馬島を主たる渡航先としつつも、一部は九州島まで渡航し、九州島の集団と接触した可能性も考えておく必要がある。西唐津式において壺は基本的に器種組成をなさないが、唐津湾に所在する西唐津海底で壺頸部附近とみられる土器が 1 点出土しており（廣瀬 2013）、搬入品ではないものの、九州本島への渡航を示す資料である可能性がある。

縄文時代前期後半（曾畑式期）には玄界灘島嶼域で遺跡数・規模が増加し、東三洞や黄城洞などに曾畑式土器が搬入されるが、基本的に日韓の土器に影響関係はみられなくなる時期が再び始まる段階であると考えている（古澤 2013a）。九州島でも韓半島からの搬入土器は認められない。

縄文時代中期（船元式期～阿高式期）では対馬島で韓半島系土器が過半を占める夫婦石がみられる一方、九州本島では基本的に搬入土器は認められない。依然として対馬島を中心とした交流であり、その余波がわずかに壱岐島に及んでいると評価される。また、この時期の縄文土器にも韓半島からの影響は認められない。

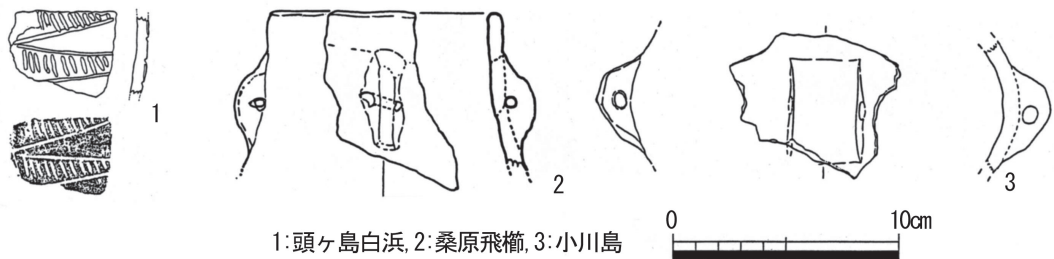


図40 対馬島・壱岐島以外で出土した韓半島系土器

縄文時代後期初頭・前葉（坂の下式期）では西北九州全体で海での活動が活発化し、遺跡数自体も増加するが、こうした傾向は玄界灘島嶼域でも確認される。この段階では東三洞でも対馬島の吉田やヌカシでも相互の土器が確認され、交流自体は行われているが、対馬島以外での韓半島系土器は、小川島（富樫・木村 1982）で水佳里Ⅲ期の把手附壺の搬入土器（図40-3）が1点、九州島では唯一の韓半島系土器の事例として桑原飛櫓（木村 1992）で水佳里Ⅱ～Ⅲ期の把手附壺の模倣土器（図40-2）1点を数えるのみである。従って、この段階も韓半島からの渡航集団は対馬島を最終目的地とし、その余波が玄界灘沿岸部に及んでいるものと考えられる。また、この時期の縄文土器にも韓半島からの影響は認められない。

以上の縄文時代早期から後期前葉までの日韓交流の特徴として、木村幾多郎が指摘するように、九州本島では韓半島新石器時代土器の搬入品は出土していない（木村 1997, 2003）。また、前期中葉の一時期を除外すると基本的に九州の縄文土器は韓半島からの影響を基本的に受けていない。このことについて水ノ江和同は「言葉」による情報の伝達や交換ができなかった状況という可能性を想定している。しかし、筆者は韓半島南部地域における黒曜石の搬入状況（鄭澄元・河仁秀 1998, 河仁秀 2001, 2004, 2006, 河仁秀・李柱憲 2001）等から、交流の内容として交易という側面があり、交易を行うにあたって、沈黙交易（無言貿易）（岡 1928）を行わない限り、言葉による応酬はあったものと考えている。東三洞から出土する縄文系土器が典型的なものではないことについて水ノ江は、縄文人の長期滞在・世代交代の結果とみている（水ノ江 2007）。また東三洞で縄文系土器が韓半島新石器時代土器とともに出土し、排他的に出土しているわけではないことから、東三洞の集団内で縄文人の生命は保証されていたとみられ、沈黙交易のみが行われた可能性は低いとみられる。従って、言葉は異なっても集団の成員の中に相互の言葉を解する人物がいる以上、言葉の不通が原因であるとは考えがたく、筆者は、土器様式の形成に集団の規制が働いているという点から、精神文化の差異にこの原因を求めた。日韓間では土偶をはじめとする精神文化を表象する遺物にほとんど共通点が認められないこと（川道・古澤 2012, 古澤 2014b）はこの証左である（古澤 2013c）。韓半島南部の壺という比較的祭祀色の強い土器が対馬島を中心に選択的に搬入されている（古澤 2010, 2011）にも関わらず、それでも縄文土器様式の中に受容されることはなかったことは精神文化に関わる事項を縄文人が受容しなかったということを如実に表している。日韓間で共通するとされる精神文化関連遺物としては貝面が挙げられる。九州島の貝面は縄文時代中期から後期まで認め

られ素材はイタボガキやマダカアワビで、2孔穿孔するものと3孔穿孔するものがある。韓半島南部では東三洞国博第3次調査4層（隆起文土器～水佳里Ⅰ式出土）で3孔穿孔したホタテガイ製の貝面とイタヤガイ製の2孔貝製品が出土している。また東三洞釜博調査2層（水佳里Ⅲ式出土）では2孔の有孔貝製品が出土している。島津義昭は九州島と東三洞で出土した貝面を精神文化の交流として把握した（島津1992）。山崎純男は環玄界灘漁撈圏での共通性として積極的に解釈している（山崎2001）。一方、水ノ江和同は日韓間の貝面に目孔・口孔の類似がみられるが、サイズやそのほかの表現については類似が見られないことを述べ、縄文時代後期初頭に出現する西日本の土面との関係も想定している（水ノ江2012）。使用される貝種が異なることや、東三洞での時期が明確でないことから、筆者は貝面を精神文化の交流の根拠とするには十分ではない段階であると考えている。また、仮に九州島と東三洞の貝面に関連が認められたとしても、東三洞は九州との交流拠点という特殊な性格を持つ遺跡であり、韓半島南海岸で貝面が一般的に十分に定着していたものであるかどうか議論の余地がある。貝面については可能性を留保しながらも、基本的に縄文時代の日韓間で精神文化遺物は共通しないと筆者は考える。このような精神文化上の差異は九州の縄文土器に韓半島の土器の影響がほとんどみられない要因の一つである。

また、先述のとおり日韓交流の内容として九州本島で産出する黒曜石をめぐる交易があったと考ええると、韓半島からの渡航集団は対馬島で拠点を作ったように、壱岐島や九州島玄界灘沿岸部に同様の拠点を作り、原産地附近で直接黒曜石を入手してもよさそうなものであるが、そのような遺跡はこれまでのところ確認されておらず、対馬島以南の島嶼や九州本島へ積極的に渡航できない何らかの障壁があったものと思われる。そして、韓半島からの渡航集団の主要最終目的地が独自の土器様式を形成することのない集団の居住する対馬島であり、土器様式の形成を決定する九州島の大きな集団と直接接する機会に乏しかったことも、九州の縄文土器に韓半島からの影響がほとんどみられない要因であると考えられる。

2. 縄文時代後期中葉～晩期後半の様相

縄文時代後期中葉（鐘崎式期～太郎迫式期）には対馬島を中心に比較的規模が大きな遺跡が分布するにも関わらず、韓半島からの搬入土器は確認されない。そして、九州島でも韓半島からの搬入土器は確認されず、縄文土器にも韓半島からの影響は認められない。日韓交流の低調化が開始しているものと考えられる。

縄文時代後期後葉（三万田式期）には、玄界灘島嶼域での遺跡の存在自体が不分明であり、あるいは、縄文時代後期末から晩期前半の土器が出土している壱岐島の大久保や堂崎ではそれまでの縄文時代遺跡とは立地が異なるので、三万田式期の遺跡もそれまでの縄文時代遺跡とは立地が異なる可能性もある。九州島でも韓半島からの渡来要素がみとめられる土器はこれまでのところ認められていない。土器以外の要素としては三万田式期に現われる玉類が韓半島から取り入れられたとする見解がある（大坪2003）。この見解を受け、宮本は玉の持つイデオロギー的な精神世界の伝播であ

ると把握し、それ以前の交流とは質を異にしていると述べている（宮本 2004）。問題は該期の韓半島南部の様相が不分明である点にある。三万田式期の玉類が韓半島からの影響下で成立したという見解が正しければ、宮本が述べるように精神文化面に影響を及ぼしているという点で、これまでの縄文時代の日韓交流より深い交流であったものと考えざるを得ないが、不自然なまでに玄界灘島嶼域を含め、北部九州では韓半島系の遺物が確認されない。

縄文時代晩期後半（黒川式期）には、対馬島の泉で韓半島からの影響による石棺墓が築かれるが、例外的な存在で、玄界灘島嶼域ではあまり韓半島からの影響を受けた痕跡はみられない。一方、九州島におけるこの時期の韓半島からの渡来要素として孔列が施文される土器が挙げられている（田中 1986, 武末 1987）。黒川式期から板付 I 式期までの時期の土器に孔列文が施される土器がみられる。田中良之は孔列が在来の粗製深鉢に施文されていることから在来伝統と規制の中が健在な中、マイナーな要素として取り入れられた折衷土器とみている（田中 1986）。武末純一はこれらの孔列施文土器がどの遺跡でも一定の比率を占めるということはないという現象に注目し縄文人の主体的な選択力・受容消化力の大きさをあらわしているとした（武末 1987）。この黒川式期の孔列土器は韓半島からの影響であるとする見解は多くの研究者に継承され（安在皓 1992, 秦 1995, 光永 1995, 片岡 1999, 松本 2000,）、近年では韓半島における孔列土器の地域性に着目し、西日本各地の孔列土器の祖地を想定する研究も提示されている（千羨幸 2008）。このような孔列土器は大きな注目を浴び、幾度か地名表が作成され、その分布は九州北部を中心に九州南部、瀬戸内、山陰地方まで確認されている（秦 1995, 光永 1995, 片岡 1999, 千羨幸 2008）。

しかし、黒川式期からみられる孔列土器の祖形を韓半島に求める見解に対して、一方では否定的な見解や慎重論もある（後藤 1987, 深澤・庄田 2009）。三阪一徳は孔列および孔列以外の製作技術を検討した結果、「韓半島の孔列土器の影響下で日本列島の孔列土器が成立した可能性は十分あるが、現状では他人の空似の可能性を棄却するだけの根拠も十分ではない」という見解を示している（三阪 2010）。

これまで、韓半島の孔列土器そのものが日本列島で確認されたことはないと言われる（庄田 2004, 宮地 2006）。このことは黒川式期に現われた孔列文が韓半島由来であるという見解に疑念を抱かせる要因となる。ただし、土器以外の文化要素として北九州市貫川遺跡で磨製石庖丁が出土していること（前田・武末 1994）から黒川式期の韓半島との交流は認められるところであり、このような点からは黒川式期の孔列土器も韓半島に由来する可能性も排除しきれない。筆者の立場としてはどちらの可能性も留保した三阪の見解に近い。

仮に、黒川式期の孔列土器が韓半島の影響で製作されたものであった場合、量的に少なく、取り入れられた要素はマイナーなものであったとしても、九州の縄文土器史上、西唐津式以来の強い影響を受けたものと認めざるをえない。しかし、現状では西唐津式期の様相と次の点で大きく異なっている。

①対馬島、壱岐島、沖ノ島では黒川式期において韓半島との関係を考えることができる資料がな

いわけではないが、例えば西唐津式期の対馬島で夫婦石遺跡にみられるように瀛仙洞式土器が圧倒的な量を占めるといったような韓半島系の遺物が過半を占める遺跡はこれまでのところ確認されていない。②また、韓半島系の遺物であることが確実な石庖丁が九州本島の響灘・周防灘沿岸でも確認されるという状況は、縄文時代後期前半までの韓半島系遺物が基本的に対馬島を中心に濃密に分布し、周辺の島嶼や九州島沿岸部にわずかにその余波が及んでいるという状況とは全く異なる。

縄文時代後期前半までの対馬島を中心に韓半島と交流を行っていた時期と比較すると、交流自体は存在しても、交流の上で果たす玄界灘島嶼域の役割は低下しているものと思われる。この点で、黒川式期の孔列土器が韓半島の影響で製作されたものであった場合、韓半島からの渡航集団は、西唐津式期よりも、九州本島を最終渡航地として志向していた可能性もある。

3. 弥生時代早期の様相

夜臼式期の九州島の土器にみられる韓半島からの影響としてこれまで、搬入土器・模倣土器、壺、粘土の接合方法などが指摘されてきた。

夜臼式期の搬入土器や模倣土器については家根祥多が曲り田、菜畑などの資料に韓半島からの搬入土器があることを指摘している（家根 1996, 1997b）。近年、小南裕一は、曲り田（橋口編 1984）、高田小生水（江野編 2001）、菜畑（中島・田島編 1982）8 上層で出土した内湾口縁甕（図 41-1, 2）、雀居（松村編 1995）SK159 出土把手附内湾口縁甕（図 41-3）、雀居 SD03 下層、菜畑 9～12 層出土大型壺（図 41-5, 6）、菜畑 9～12 層、曲り田出土小型壺（図 41-7, 8）などを例示している（小南 2006）。また五島列島最北部に所在する宇久松原（川道 1997）では 6 号支石墓に供献された赤色磨研小壺（図 41-4）が出土しており、韓半島系土器と認識されている。この土器の形態は韓半島で確認されておらず、内面に貝殻条痕調整がみられることから報告者の川道寛が指摘したとおり韓半島系土器を模倣して在地の縄文土器の技法で製作されたものである。橋口達也は曲り田の弥生時代早期土器 2192 点のうち韓半島の土器やその可能性があるものは 20 点余りであるとしている。橋口は全体の 1% に満たないと述べ、赤色磨研壺を含めても韓半島から直接北部九州にもたらされたものはわずかな量であったと評価している（橋口 1999）。これは同時期の在地の土器との量的比較からすれば妥当な評価である。しかし、韓半島新石器時代土器の搬入土器は圧倒的に対馬島で出土し、それ以外の島嶼、九州

本島では、1 遺跡で 1 点程度のわずかな点数しか出土していない状況からみると、曲り田をはじめとした玄界灘沿岸部を中心とする九州本島で極少量ではあ

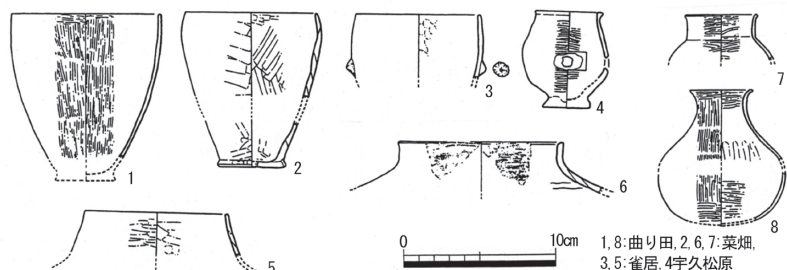


図 41 九州島で出土した韓半島系土器

っても複数の搬入土器とみられる土器が出土することは、以前の状況とは全く異なり、非常に重要な意味を持つ。

家根祥多は粘土帯積み上げの際に縄文土器では内傾接合であるのに対し、韓半島に由来する外傾接合が夜臼式期から板付 I 式期に優勢になることを指摘した（家根 1984,1987,1996,1997a,b）。この外傾接合でつくられた土器が出現し、組成に加わることを重視し、このことをもって弥生時代早期を設定すべきであるという見解（宮地 2004）もある。

夜臼式期の九州島に出現する壺は韓半島からの渡来要素として早くから指摘されていた。夜臼式のほかの器種は在来の伝統を踏襲しており従来の器種組成に壺が導入されたという様相を呈している（田中 1986）。夜臼式期の壺には大型の壺と赤色磨研されることの多い小型の壺がある。大型壺は、同時期の韓半島南部に形態が類似したものは認められず、小型壺の比率を縦長に変換した形態を示している一方、小型壺は韓半島南部に形態が類似したものが認められるため、大型壺は小型壺を導入するやいなや成立したと中園聡は指摘している（中園 1994）。韓半島中南部ではこれまで知られている青銅器時代最古の段階である刻目突帯文土器（淡沙里式）の段階から既に甕（深鉢）と壺の組成がみられる。この甕と壺の組成は遼東半島の双砬子 3 期を介して韓半島青銅器時代の文化に受容されたものであることは既に宮本一夫により指摘されており（宮本 2009）、支持される。ただし宮本は韓半島中南部の刻目突帯文土器の系譜を韓半島東北部に求めているが（宮本 2004）、筆者は鴨緑江流域に系譜を求める立場である（古澤 2012）（註 10）。

赤色磨研されることの多い小型壺については韓半島青銅器時代の小型壺と形態上類似するため、早くから韓半島に系譜を求める見解が提示されており（杉原 1977, 沈奉謹 1979, 後藤 1980）、多くの研究者が等しく共通認識としていっているところである。韓半島では縦方向の研磨が多く、九州島では横方向の研磨が多いとされてきたため（後藤 1980）、横方向に研磨する縄文土器伝統により九州島の小型壺が製作されたとする見解が示されたことがある（中園 1994 ほか）。しかし、河仁秀は横研磨は韓半島にも認められ韓半島南部の影響で九州島の小型壺が出現したとしており（河仁秀 1992）、端野晋平は頸部の研磨方向は頸部の長さ・形態に規制される可能性が高く文化的系統差を示す属性ではないと指摘している（端野 2003）。

中村大介は、赤色磨研小壺は韓半島では住居址および墓地で出土するが、九州島では少数例を除外するとほぼ墓地から出土しており、このことは韓半島の小壺の副葬・供献という習俗の受容を示すと指摘している（中村 2003）。赤色磨研壺は祭祀において必要な道具とみられるが、小林青樹は更に踏み込み、再生装置として壺の象徴性を想定している（小林 2013）。家根祥多は早くから種々の物質文化のみならず韓半島から宗教・思想が伝わったことを指摘している（家根 1984,1996,1997b）。夜臼式期にみられる精神文化に関わる祭祀土器である赤色磨研壺の在地様式への導入はそれまでの縄文時代の土器文化交流とは大きく異なる事象である。縄文時代後期前葉まで対馬島・玄界灘沿岸部では、壺が選択的に搬入されてきていたにも関わらず、壺が縄文土器様式に加わることはなかった。しかし、韓半島由来の祭祀土器が九州島の様式に組み込まれるのが、この

夜臼式の状況であり、これこそが縄文時代から弥生時代への大きな変革であったと考えられる。

以上を整理すると夜臼式期の土器にみられる韓半島からの影響として、九州本島で複数の搬入土器や模倣土器が確認されること、土器様式に韓半島に由来する器種が組み込まれ、祭祀に関係する器種もみられること、土器の製作技術といった面にも韓半島の影響が認められることといった諸点は、以前の時期ではいずれもみられなかった事象であり、韓半島からの非常に強い影響があったものと考えられることができる。

しかし、夜臼式期には韓半島からの非常に強い影響を受容しているにも関わらず、先述のとおり日韓間の中間地帯である対馬島や壱岐島で、韓半島系土器の出現頻度、内容が縄文時代前期～後期前葉よりむしろ弱化しているというのは興味深い現象である。九州本島で韓半島搬入土器が出土するように変化していることも勘案し、筆者はこの理由を韓半島からの渡航集団の中に主要最終目的地を対馬島ではなく九州本島に定めた集団が現われたという状況に求めたいと考えている（註11）。既に、家根祥多は唐津湾周辺から糸島半島西部にかけての限られた地域に韓半島から比較的小規模な移住があったと渡航先を限定した見解を述べている（家根 1994,1996,1997a）。端野晋平は気候冷涼化に伴い黒川式期から水稻農耕に適した風土があるという情報が蓄積されており、次の気候冷涼化によって夜臼式期に体系的な文化要素の伝播や、やや規模の大きな渡来が生じたと想定しており（端野 2008,2010）、この想定に従えば、対馬島では少ない水稻農耕の適地が九州本島に存在することが主要最終目的地の変化の原因であるとみられる。

この時期の九州島では土器以外にも韓半島に由来する文化要素が多くみられる。精神文化に大きく関わる祭祀土器について韓半島に起源を持つ土器が九州島の土器様式に組み込まれるということと関連して、精神文化に深く関わる墓制にも注目する必要がある。これまでの研究で幾度も指摘されてきたとおり支石墓は韓半島から受け入れられた墓制である（Kagamiyama1955 ほか）。

ところが、対馬島や壱岐島ではこれまで支石墓が発見されていないということは早くから指摘されており、大きな課題とされてきた（高野 1979 ほか）。壱岐島でも支石墓ではないかとされる巨石が何例かある。勝本町百合畑触に所在する亀石や石田町筒城仲触に所在する白沙八幡神社の拝殿内にある唐（韓）櫃石（註12）などが支石墓ではないかとされたことがあるが、筆者は実地踏査しても支石墓であるとの確証を得ることはできなかった。今後、支石墓が対馬島や壱岐島で発見される可能性は皆無ではないが、可能性は低く、発見されたとしても小規模なものであらうと考えられる。このように対馬島や壱岐島で支石墓が確認されていないことは支石墓の伝播ルートをめぐる議論に大きな影響を及ぼしてきており、これを積極的に解釈した結果として、済州島から五島列島や肥前西部に伝播したという見解が提示されている（本間 1991, 森田 1997）。一方、到着地について玄界灘沿岸地域の北部九州であるとみる見解（森 1969, 甲元 1978, 西谷 1980,1997, 岩崎 1980, 高倉 1995, 宮本 2012）もある。川道寛は玄界灘沿岸地域到着説を支持し、対馬島や壱岐島で縄文時代晩期後半の遺跡自体が少ないため、九州島への中継地という性格よりも通過地点と位置づける見解を提示している（川道 1997）。端野晋平は対馬島・壱岐島を介して玄界灘沿岸地域に至る伝播ルート

を想定しているが、泉遺跡の箱式石棺墓や井手遺跡の韓半島系土器の存在から韓半島南部と対馬島の交流自体は存在し、支石墓の発見はなくても伝播ルートたりうるとしている（端野 2001）。ただし弥生時代前期・中期に比べ対馬島では交流を示す遺物は希薄で稲作適地の少なさからみてあくまで九州島に到達するための中継地点であると把握している（端野 2003）。

筆者は支石墓が対馬島や壱岐島で発見されない理由については韓半島系土器の様式的受容と類似した状況ではなかったかと考えている。対馬島や壱岐島には川道の指摘のとおり数は少ないものの、夜臼式期の遺跡自体は確実に存在する。しかし、遺跡の規模や出土品の量などからみて、支石墓という精神文化を規定する墓制の受容に係る決定を行い、それを九州島に流布するほどの影響力を持った大きな集団が存在したとは思われない。今後、対馬島や壱岐島で支石墓が発見されたとしても、それは九州島で受容された支石墓が伝播したものである可能性を考えなければならないものと思われる。従って、対馬島や壱岐島で支石墓が確認されないことを以って、支石墓伝播ルートを考察する上での大きな論拠とすることには問題があるものと考えている。こうした支石墓の分布状況からも日韓交流で果たす玄界灘島嶼域の役割が相対的に低下し、韓半島からの渡航集団の中には九州本島を主要最終目的地とした集団が現われたということが支持されるのである。

VII. 弥生時代早期と比較した縄文時代日韓交流の性格

これまで縄文時代の漁撈民による交流が弥生時代早期の農耕民による交流の基盤となった、あるいは縄文時代以来の長い文化的伝統の上に、初期農耕が渡来したということが縄文時代研究者からも弥生時代研究者からも指摘されてきた（渡辺 1985, 高倉 1995 ほか）。その根拠となったのは夜臼式期の支石墓の分布が石鋸などの分布範囲を踏襲すること（山崎 1980）などであった。これは 1980・90 年代当時における最新の研究成果に基づいてなされた推論であったが、日韓交流を示す資料が不足し、縄文時代全般を俯瞰することができないという制約がある中での推論であったともいえる。支石墓が伝来する時期と直接繋がらない時期の遺物である西北九州型釣針や石鋸の分布から縄文時代の交流が弥生時代早期の交流に繋がったと考えることは現状では困難であると考えられる。

むしろ本稿で検討したように縄文時代全般を通した日韓交流のあり方には断絶と画期がある。玄界灘島嶼域、とりわけ対馬島を中心にみた場合、縄文時代早期から縄文時代中期までは対馬島を渡航の最終目的地とした結果、残されたとみられる遺跡が存在し、縄文時代後期前半の坂の下式期には島嶼域での小規模な遺跡が増加し、外洋活動が活発化するのに伴い双方向的な韓半島との交流が継続して盛期を迎える。しかし鐘崎式期や北久根山式期には対馬島、壱岐島で比較的大きな規模の遺跡が存在するにも関わらず、少なくとも土器については日韓交流の低調化がみられ、三万田式期には玄界灘島嶼域で遺跡自体がほとんどみられなくなる。この断絶の時期を経て黒川式期には玄界灘島嶼域では遺跡立地が変化しており、日韓交流の痕跡も以前の時期ほど多くは認められない。その後、韓半島から九州島へ大きな影響関係がみられる夜臼式期でも玄界灘島嶼域では交流自体は認

められるものの、縄文時代早期～後期前葉ほど集中して韓半島系遺物が認められなくなるという状況になる。

こうしてみると縄文時代後期後葉を境界に日韓交流上での対馬島をはじめとする玄界灘島嶼域の役割や重要性が大きく変化したということが指摘される。また、韓半島系遺物の集中度などから韓半島からの渡航集団の中に九州本島を最終目的地とする集団が現われるという状況に変化したものと考えられる。このことと関連し、集団の精神文化に関する規制を決定付ける集団規模が存在する九州本島との接触により、祭祀土器が様式として受け入れられるという交流内容の性格変化も認められる。高倉洋彰は縄文時代の交流は短期的・通過型の漁民の交流（漁民型交流）で、弥生時代の交流を長期的・滞在型の農民の交流（農民型交流）であり、交流の性格が異なることを指摘している（高倉 1995）。漁民の交流が短期的、通過型であったのかということについては問題があるが、日韓交流の変遷がよく表現された指摘である。筆者はここに韓半島からの渡航集団の主要最終目的地の変化（対馬島→九州本島及び対馬島）や精神文化の受容与否も加えたい。このように弥生時代早期と比較することで、縄文時代の日韓交流の特質として①韓半島からの渡航集団は対馬島を主要最終渡航地とし、②精神文化上の交流はほとんどみられないという2点が挙げられ、この2点こそが、一部の事例を除外し、基本的に九州縄文土器に韓半島からの影響が認められない主要因であるものと考えられる。

そして、縄文時代と弥生時代早期のこのような交流の性格・内容の差異に加え、玄界灘島嶼域の場合、三万田式期を中心とする時期に日韓交流の大きな断絶があることも重要である（註13）。交流の性格・内容の差異と時期的な断絶は看過しえないことであり、縄文時代の漁撈民の交流の基盤の上に弥生時代早期の水稻稲作農耕の導入が行われたとする従来の単線的な発展史観は、現況では成立しないのである。

本研究は公益財団法人韓昌祐・哲文化財団助成基金（学術研究「東北アジア的視点から見た韓半島新石器時代土器の研究」）による助成を受けたものである。本稿をなすにあたっては大貫静夫先生をはじめ次の諸先生・諸氏から多くのご教示を賜りました。記して感謝いたします。

阿比留伴次、安楽勉、犬童淳一郎、川畑敏則、川道寛、川村明人、副島和明、田中聡一、中尾篤志、廣瀬雄一、松見裕二、水ノ江和同、宮本一夫、山内正志、山崎真治

そして、2013年5月にご逝去された高野晋司氏の学恩に深く感謝し、ご冥福をお祈りするものです。

註

- 1) 志多留貝塚発掘当時は八学会であった。
- 2) 田中聡一氏ご教示。
- 3) 対馬島、壱岐島以外では貝殻条痕貝殻粉混和土器として五島列島の中島（村川編 1987, 川道編 1997, 甲元編 2001）、宮下（古門・宮路・川道 1998）などで縄文時代後期中葉の事例、五島列島の西ノ股

(久原編 1988)、白浜(安楽編 1980)、佐世保市高島の宮の本(久村編 1981)などで晩期の事例が確認されている。西田泰民は額拉蘇 C 出土貝殻混入土器を分析する中で、土器に炭酸カルシウムを多く含むものを混和することは素地を圧迫し、亀裂や破損が生じるため通常は避けるべきことであるが、O.S. ライが貝殻を含む砂を混入しても素地の調整に海水を用いると破損が少ないと報告していること(Rye1976)などを踏まえ、塩を含ませることで亀裂や破損を防止できると述べている(西田 1987)。九州縄文時代後・晩期貝殻粉混和土器は塩分濃度の高い胎土を用いなければ、海水を用いて製作されたものとみられる。当該土器が玄界灘島嶼域や五島列島などの海に面した遺跡で多くみられることは海水の入手が容易であったことと関連する可能性が高い。

4) このことについて山崎真治氏との議論によって多くのご教示を得た。記して感謝申し上げます。

5) 九州では縄文時代早期から晩期まで一貫して洪水によって埋没するような縄文人が居住することができない低湿地に居住域とは離れて設けられるという指摘がある(水ノ江 2012)。名切の貯蔵穴はまさに低湿地型貯蔵穴であり、居住域は調査範囲からやや離れたところにある可能性が高い。

6) 安島貝塚 I 層出土型式不明縄文土器の中で断面円形の棒状工具で口縁部に 3 列刺突した土器(報告書図 014)は類例がつぐめのはなⅦ層(正林・村川 1986:65)などでみられ、筆者は縄文時代早期末の所産であると考え。

7) 阿高式か坂の下式か弁別できない資料について表 5 では(うち阿高式系)と表示した。

8) 小田富士雄の論文には「よこ方向の研磨が加えられ」という記述があるが(小田 1986)、実物資料を観察すると縦方向のミガキである。

9) 1977 年調査大坪里玉房 1 号住居址で出土した赤色磨研壺は小田が依拠した概報(趙由典 1979)では上げ底様の実測図が公表されていたが、正式報告(趙由典 1994)では丸平底の実測図が掲載されている。近年の韓半島の赤色磨研壺についての諸研究(김미영 2010,2013, 宋永鎮 2012,2013)においても上げ底の壺はほとんど確認することはできない。

10) 韓半島中南部の刻目突帯文の年代には種々議論があるが、筆者は鴨緑江中・上流域の深貴里 I 期、鴨緑江下流域の新岩里 2 期、太子河上流域の廟後山上層早期に系譜を求めており、新岩里 2 期は遼東半島の双砬子 2 期末から双砬子 3 期に併行すること(古澤 2012)と新岩里 2 期層で出土した青銅刀の類例が殷墟婦好墓に求められることから(古澤 2013d)、その上限年代を紀元前 13 世紀末～紀元前 12 世紀初前後と考えている。貯蔵用の大型壺が九州島で夜臼式期に始めて導入されることは、対馬(大韓)海峡を挟み、数百年間は導入しない時期があったものと認められる。

11) ただし、井手などで韓半島系土器が出土するように、韓半島-対馬島間の交流も同時に認められ、九州島を最終目的地とすることは前段階との相対的な比較でのことである。

12) 亀石(地元ではガメシと発音する)や唐櫃石は古くから知られた巨石である。後藤正恒と吉野鞆千代により 1861 年(文久元年)に著された『杵岐名勝図誌』には亀石について「堅己辛七尺廿寸、横丁癸七尺一寸五歩、周二丈一尺五寸、高二尺七寸余、頭寅卯向」という記述があり、唐櫃石については「韓櫃石 拝殿内にあり。図次に出す。此石、堅四尺三寸二分、横二尺八寸一分、高二尺三寸六分。

土上板敷上所現高九寸七分。むかしより、人敬て上ることあたはず。伝云、中昔拝殿造替の時、此石を除かんとせしかハ、石より血氣流れ出たり。故人恐れて止たりとぞ。」という記述がある。

13) これまで縄文時代後期後半から徐々に韓半島青銅器時代文化の影響を受け弥生化が段階的に達成されたとする見解（田中 1986, 松本 2000, 宮本 2004, 端野 2008, 2010 ほか）が主流を占めてきたが、最近では反対意見（小南 2008）も提示されており注意される。筆者は先述のとおり黒川式期の孔列土器に対して判断を留保している状況であるため、黒川式期と夜臼式期の日韓交流上の断絶性の有無についても留保せざるをえない。本稿では三万田式期に確実に断絶があることのみを示しておきたい。

引用文献

〈日文〉

- 阿比留嘉弘・永留久恵 1986 「佐賀貝塚発掘調査と、豆殻の大蔵経整理」『対馬の自然と文化』14
- 安楽勉 1976 「壱岐島における旧石器」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第 26 集
- 安楽勉 1993 『木坂海神社弥勒堂跡 - 発掘調査報告 - 』峰町文化財調査報告書第 11 集
- 安楽勉 1994 「対馬における韓国新石器文化との交流」『考古学ジャーナル』376
- 安楽勉 1996 「原始・古代の対馬」『原始・古代の長崎県 資料編 I 』長崎県教育委員会
- 安楽勉 1998 『車出遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 8 集
- 安楽勉 2011 「対馬・壱岐における刻目突帯文土器の様相」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』1
- 安楽勉編 1980 『白浜貝塚』福江市文化財調査報告書第 2 集
- 安楽勉編 2000 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 18 集
- 安楽勉編 2001 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 22 集
- 安楽勉編 2002 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 25 集
- 安楽勉・阿比留伴次 1993 『木坂海神社弥勒堂跡』峰町文化財調査報告書第 11 集
- 安楽勉・川畑敏則・古澤義久 2014 「壱岐市石田町堂崎遺跡採集資料」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4
- 安楽勉・藤田和裕編 1978 『原の辻遺跡（Ⅲ）』長崎県文化財調査報告書第 37 集
- 安楽勉・藤田和裕編 1985 『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第 71 集
- 石井泰義・鎌田泰彦 1965 「壱岐及び対馬の地形と地質」『壱岐・対馬自然公園学術調査報告書』日本自然保護協会調査報告第 19 号
- 岩崎二郎 1980 「北部九州における支石墓の出現と展開」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
- 大坪志子 2003 「縄文の玉から弥生の玉へ」『先史学・考古学論究Ⅳ』
- 大貫静夫 2013 「朝鮮半島」『講座日本の考古学 3 縄文時代 上』青木書店
- 岡崎敬 1953 「対馬の先史遺蹟（一）」『対馬』東方考古学叢刊乙種第 6 冊
- 岡正雄 1928 「異人その他」『民族』3-6
- 小田富士夫 1986 「北部九州における弥生文化の出現序説」『九州文化史研究紀要』31

- 片岡宏二 1990「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代朝鮮と日本』名著出版
- 片岡宏二 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣
- 鐘ヶ江賢二・三辻利一 2004「吉田遺跡出土土器、および関連遺跡採集土器の胎土分析」『対馬吉田遺跡 - 縄文時代遺跡の発掘調査 -』
- 河合章行編 2002「大久保貝塚」『考古学研究室報告第37集』
- 河合雄吉 1998『中尾遺跡』石田町文化財調査報告書第2集
- 河合雄吉編 2002『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第5集
- 河合雄吉編 2004『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第8集
- 川口洋平・松永泰彦 1998『興触遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告第7集
- 川畑敏則 2008「古代壱岐の島探索 (9) 縄文時代の遺跡」『原の辻ニュースレター』30
- 川畑敏則編 2011『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 川道寛 1997『宇久松原遺跡』宇久町文化財調査報告書第4集
- 川道寛 2013「長崎県における縄文時代前期後葉土器の様相」『曾畑式土器とその前後を考える』第23回九州縄文研究会沖縄大会
- 川道寛編 1997「中島遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書V』長崎県文化財調査報告書第133集
- 木村幾多郎 1992「把手付土器の二者」『季刊考古学』38
- 木村幾多郎 1997「交易のはじまり」『考古学による日本歴史10 対外交渉』雄山閣
- 木村幾多郎 2003「縄文時代の日韓交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ』同成社
- 久原卷二 1988「対馬の遺跡分布と社会の変容」『中道壇遺跡』長崎県文化財調査報告書第90集
- 久原卷二編 1988『西ノ股遺跡』新魚目町文化財調査報告書第2集
- 江野道和編 2001『高田小生水遺跡』前原市文化財調査報告書第76集
- 小石龍信編 2001『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第2集
- 甲元眞之 1978「西北九州支石墓の一考察」『法文論叢 文科篇』41
- 甲元眞之 2005「砂丘の形成と考古学資料」『文学部論叢 (歴史学篇)』86, 熊本大学文学部
- 甲元眞之 2001「中島遺跡発掘調査報告」『環東中国海沿岸地域の先史文化』5
- 後藤直 1980「朝鮮南部の丹塗磨研土器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
- 後藤直 1987「朝鮮系無文土器再論 - 後期無文土器系について -」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』中, 同朋舎
- 小林青樹 2013「縄文の思想, 大陸の思想, 弥生の思想」『季刊考古学』122
- 駒井和愛・増田精一・中川成夫・曾野寿彦 1954「考古学から見た対馬」『対馬の自然と文化』総合研究報告 №2, 古今書院
- 小南裕一 2006「日韓農耕文化成立期の土器編年と併行関係 (予察)」『日韓交流史理解促進事業調査研究報告書』
- 小南裕一 2008「日韓農耕文化成立期の土器に関する諸問題」『地域と文化の考古学』Ⅱ

- 坂田邦洋 1975a 「住吉平貝塚」『対馬の遺跡』長崎県文化財調査報告書第 20 集
- 坂田邦洋 1975b 吉田貝塚『対馬の遺跡』長崎県文化財調査報告書第 20 集
- 坂田邦洋 1976 「志多留貝塚」『対馬の考古学』縄文文化研究会
- 坂田邦洋 1978a 『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷出版事業部
- 坂田邦洋 1978b 『対馬ヌカシにおける縄文時代中期文化』別府大学考古学研究室報告第 1 冊
- 坂田邦洋 1979 『対馬越高尾崎遺跡における縄文前期文化の研究』別府大学考古学研究室報告第 3 冊
- 佐野貴司 1995 「壱岐火山群の地質：主に K-Ar 年代に基づく溶岩流層序」『火山』40-5
- 島津義昭 1992 「縄文時代の貝面」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷第 II 集』
- 下川達彌 1970 「長崎県内壱岐島発見の石器」『長崎県立美術博物館館報』昭和 44 年度
- 下條信行 1996 「井手遺跡」『原始・古代の長崎県 資料編 I』長崎県教育委員会
- 庄田慎矢 2004 「韓国嶺南地方南西部の無文土器時代編年」『古文化談叢』50
- 正林護 1985 「「南北市糴」の島「対馬」- 最近の対馬の考古資料から -」『韓国文化』7-9
- 正林護 1986a 『佐賀貝塚（略報）』峰町文化財調査報告書第 8 集
- 正林護 1986b 「対馬東岸の縄文時代遺跡」『えとのす』30
- 正林護 1987 「対馬縄文人のくらし ― 峰町佐賀貝塚の発掘」『対馬風土記』23
- 正林護 1989a 『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第 9 集
- 正林護 1989b 「対馬佐賀貝塚の調査報告補遺」『九州考古学』64
- 正林護 1995 『ながさき古代紀行 vol.1 対馬』タウンニュース社
- 正林護・宮崎貴夫編 1985 『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書第 3 集
- 正林護・村川逸朗 1986 「つぐめのはな遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報 IX』長崎県文化財調査報告書第 82 集
- 杉原敦史編 1999 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 16 集
- 杉原敦史編 2001 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 21 集
- 杉原荘介 1951 「対馬の考古学的調査」『駿台史学』1
- 杉原荘介 1977 『日本農耕社会の形成』吉川弘文館
- 副島和明 1977 「原の辻遺跡の先土器文化」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第 31 集
- 副島和明 1992a 「対馬にわたった櫛目文土器人 長崎県夫婦石遺跡」『季刊考古学』38
- 副島和明 1992b 「夫婦石遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報 X V』長崎県文化財調査報告書第 104 集
- 副島和明 1994 「夫婦石遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査年報 I』長崎県文化財調査報告書第 113 集
- 副島和明・古澤義久・川道寛 2013 「夫婦石遺跡 1993 年調査区出土資料」『韓・日 初期 新石器文化 比較研究』第 10 回 韓・日 新石器時代 共同学術大会 発表資料集
- 副島和明・山下英明編 1995 『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第 124 集
- 曾野寿彦・増田精一 1961 「長崎県吉田遺跡」『日本農耕文化の生成』
- 高倉洋彰 1995 『金印国家群の時代』青木書店

- 高倉洋彰・渡部明夫 1974 「貝口赤崎遺跡」『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第 17 集
- 高野晋司 1979 「長崎県の支石墓」『考古学ジャーナル』161
- 高野晋司 1996a 「泉遺跡」『原始・古代の長崎県 資料編 I』長崎県教育委員会
- 高野晋司 1996b 「原始・古代の壱岐」『原始・古代の長崎県 資料編 I』長崎県教育委員会
- 竹下壽・林茂・浦川虎郷・山内正志・田島俊彦・壱岐団研 1987 「壱岐島の火山層序」『地団研専報』33
- 武末純一 1987 「北九州市長行遺跡の孔列土器」『記録』24, 小倉郷土史学会 (1991 『土器からみた日韓交渉』学生社所収)
- 橘昌信・前川威洋・黒野肇 1979a 「縄文・弥生遺跡の調査」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
- 橘昌信・前川威洋・黒野肇 1979b 「縄文・弥生遺物の考察」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
- 田崎博之 2007 「発掘データからみた砂堆と沖積低地の形成過程」『砂丘形成と寒冷化現象』平成 17 年度～18 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 田中聡一 2003a 「日韓新石器時代土器編年の併行関係」『先史学・考古学論究IV』
- 田中聡一 2003b 「松崎遺跡」勝本町文化財調査報告書第 11 集
- 田中聡一 2009a 「櫛目文土器との関係」『弥生時代の考古学 2 弥生文化誕生』同成社
- 田中聡一 2013 「対馬島と韓半島南海岸地域との海上交渉」『石堂論叢』55
- 田中聡一・古澤義久 2013 「韓半島と九州」『季刊考古学』125
- 田中良之 1986 「5 縄文土器と弥生土器 1. 西日本」『弥生文化の研究 3 弥生土器 I』雄山閣
- 俵寛司 2009 「“越境”する文化 - 対馬海峡島嶼部における縄文晩期から弥生時代にかけての様相 -」『サイバー大学紀要』1
- 千羨幸 2008 「西日本の孔列土器」『日本考古学』25
- 塚原博 2003 『野首遺跡』小値賀町文化財調査報告書第 17 集
- 寺田正剛編 2006 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 33 集
- 富樫憲次・木村幾多郎 1982 「小川島」『末盧国』六興出版
- 中尾篤志 2001 「弥生時代以前の壱岐 (旧石器時代～縄文時代)」『原の辻ニュースレター』10
- 中尾篤志 2009 「西北九州地域における漁撈具の動向」『九州における縄文時代の漁撈具』第 19 回九州縄文研究会長崎大会
- 中尾篤志編 2003 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 26 集
- 中尾篤志編 2004 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 28 集
- 中尾篤志編 2005 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 31 集
- 長崎県教育委員会 1994 『長崎県遺跡地図 - 壱岐地区 -』長崎県文化財調査報告書第 112 集
- 長崎県教育委員会 1995 『長崎県遺跡地図 - 対馬地区 -』長崎県文化財調査報告書第 118 集
- 中島直幸・田島龍太編 1982 『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第 5 集
- 中園聡 1994 「弥生時代開始期の壺形土器」『日本考古学』1

- 永留久恵 1964 「先史時代」『新対馬島誌』
- 永留久恵 1967 「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」『九州考古学』32
- 永留久恵 1975 『古代史の鍵・対馬 日本と朝鮮を結ぶ島』大和書房
- 永留久恵 1976 「志多留貝塚発掘小史」『対馬の考古学』縄文文化研究会
- 永留久恵 2009 『対馬国志 第一巻 原始・古代編』「対馬国志」刊行委員会
- 中村大介 2003 「弥生文化早期における壺形土器の受容と展開」『立命館大学考古学論集』Ⅲ
- 西健一郎 1974a 「西加藤遺跡」『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集
- 西健一郎 1974b 「豊玉村出土の石器」対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集
- 西田泰民 1987 「額拉蘇C遺跡出土の貝殻混和土器について」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』6
- 西谷正 1980 「日朝原始墳墓の諸問題」『東アジア世界における日本古代史講座1』学生社
- 西谷正 1997 『東アジアにおける支石墓の総合的研究』
- 橋口達也 1974 「対馬における弥生式土器の変遷」『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集
- 橋口達也編 1984 『石崎曲り田遺跡Ⅱ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集
- 橋口達也 1985 「稲作開始前後の土器編年」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
- 橋口達也 1999 『弥生文化論 稲作の開始と首長権の展開』雄山閣
- 端野晋平 2001 「支石墓の系譜と伝播様態」『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』平成12年度韓国国際交流財団助成事業共同研究プロジェクト研究報告書
- 端野晋平 2003 「支石墓伝播のプロセス」『日本考古学』16
- 端野晋平 2003 「韓半島南部丹塗磨研壺の再検討」『九州考古学』78
- 端野晋平 2008 「玄界灘沿岸地域における渡来人とその文化－朝鮮半島との比較を通じて－」『考古学ジャーナル』568
- 端野晋平 2010 「近年の無文土器研究からみた弥生早期」『季刊考古学』113
- 秦憲二 1995 「南丘陵の調査」『久良々遺跡 倉良遺跡 天神田遺跡』一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集
- 林隆広編 2005 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集
- 林隆広編 2006 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第32集
- 林隆広編 2009 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集
- 原田大六・渡辺正気 1958 「沖ノ島の先史・原始遺跡」『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会

- 東貴之 2005 「対馬の縄文時代遺跡 - 豊玉町内新規遺跡踏査報告 -」『西海考古』6
- 東貴之 2007 「越高浜遺跡表採土器について」『西海考古』7
- 久村貞男編 1981 『宮の本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書
- 平川敬治編 1985 『串山ミルメ浦遺跡 - 第1次調査報告書 -』勝本町文化財調査報告書第4集
- 廣瀬雄一 2005 「対馬海峡を挟んだ日韓新石器時代の交流」『西海考古』6
- 廣瀬雄一 2013 「西唐津式土器再論」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』19
- 深澤芳樹・庄田慎矢 2009 「先松菊里式・松菊里式土器と夜臼式・板付式土器」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社
- 福岡県文化会館 1978 『大陸・朝鮮文化との接点 対馬の美術』
- 福田一志 1999 「西北九州における縄文後期遺跡の特性」『西海考古』1
- 福田一志・小玉友裕編 2004 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集
- 福田一志・東貴之 1998 「越高浜遺跡」『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第147集
- 藤田和裕編 1976 『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第26集
- 藤田和裕編 1977 『原の辻遺跡(Ⅱ)』長崎県文化財調査報告書第31集
- 古門雅高 2001 「長崎県峰町佐賀貝塚の再評価と課題」『新石器時代の貝塚と動物遺体』第4回 韓・日新石器文化学術세미나 発表資料集
- 古門雅高・宮路淳子・川道寛 1998 『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書第1集
- 古門雅高・渡邊康行・松下孝幸・荒木伸也 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書第1集
- 古澤義久 2010 「日韓新石器時代土器文化交流」『季刊考古学』113
- 古澤義久 2012 「韓半島における新石器時代 - 青銅器時代転換期に関する考察 - 遼東半島との併行関係を中心に -」『西海考古』8
- 古澤義久 2013a 「韓半島の新石器時代土器と西唐津式・曾畑式土器」『曾畑式土器とその前後を考える』第23回九州縄文研究会沖縄大会
- 古澤義久 2013b 「対馬市佐賀貝塚出土丸底土器について - 縄文時代後期日韓土器文化交流に関する予察 -」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』3
- 古澤義久 2013c 「九州と韓半島」『季刊考古学』125
- 古澤義久 2013d 「新岩里出土青銅刀の年代について」『中国考古学』13
- 古澤義久 2014a 「壱岐市石田町大久保遺跡採集資料」『島の科学』51
- 古澤義久 2014b 「東北アジア先史時代偶像・動物形製品の変遷と地域性」『高倉洋彰先生退職記念 東アジア古文化論攷』
- 古澤義久編 2014 『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集
- 古澤義久・田中聡一 2014 「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4
- 本間元樹 1991 「支石墓と渡来人」『児嶋隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』

- 前川威洋 1979「縄文土器」『宗像沖ノ島』
- 前田義人・武末純一 1994「北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庖丁」『九州文化史研究所紀要』39
- 増田精一 1963「長崎県対馬調査報告（二）」『考古学雑誌』49-2
- 松見裕二編 2005『原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第3集
- 松村道博編 1995『雀居遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集
- 松本直子 2000『認知考古学の理論と実践的研究』九州大学出版会
- 真野和夫 1974「井手遺跡」『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集
- 三阪一徳 2010「日本列島出土孔列土器の製作技術」『考古学は何を語るか』
- 水ノ江和同 1988「曾畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流－」『古代学研究』117
- 水ノ江和同 2003「朝鮮海峡を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』
- 水ノ江和同 2007「ふたたび、対馬海峡西水道を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶ（Ⅲ）』
- 水ノ江和同 2010「縄文文化の境界・範囲・枠組み」『考古学は何を語るか』
- 水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究』雄山閣
- 光永真一 1995「孔列文土器」について」『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財調査報告100
- 峰町 2003『峰町日韓共同遺跡発掘交流事業記録集』
- 峰町教育委員会 1990『井手遺跡調査概要』峰町文化財報告書
- 宮崎貴夫編 1998『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
- 宮崎貴夫編 1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
- 宮地聡一郎 2006「弥生文化成立に至る日韓交流史」『日韓交流史理解促進事業調査研究報告書』
- 宮地聡一郎 2004「刻目突帯文土器圏の成立」『考古学雑誌』88-1,2
- 宮本一夫 1990「海峡を挟む二つの地域－山東半島と遼東半島、朝鮮半島と西北九州、その地域性と伝播問題－」『考古学研究』37-2
- 宮本一夫 2004「北部九州と朝鮮半島南海岸地域の先史時代交流再考」『福岡大学考古学論集』
- 宮本一夫 2009『農耕の起源を探る』吉川弘文館
- 宮本一夫 2012「弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係」『古文化談叢』67
- 宮本一夫編 2004『対馬吉田遺跡－縄文時代遺跡の発掘調査－』
- 村川逸朗編 1987『中島遺跡』福江市文化財調査報告書第3集
- 森貞次郎 1966「弥生文化の発展と地域性1九州」『日本の考古学 弥生時代』河出書房新社
- 森貞次郎 1969「日本における初期支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』
- 横山順 1990「壱岐の古代と考古学」『海と列島文化3 玄界灘の島々』小学館
- 横山順・田中良之 1979「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』54
- 家根祥多 1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
- 家根祥多 1987「弥生土器のはじまり－遠賀川式土器の系譜とその成立－」『季刊考古学』19
- 家根祥多 1996「縄文土器の終焉」『歴史発掘第2巻縄文土器出現』講談社

- 家根祥多 1997b 「先史土器にみる日本列島の「東」と「西」」『月刊文化財』409
- 家根祥多 1997b 「朝鮮無文土器から弥生土器へ」『立命館大学考古学論集』1
- 山内正志 2013 「壱岐島に分布する主な流紋岩について」『島の科学』50
- 山崎純男 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
- 山崎純男 2001 「海人の面 - 九州縄文時代精神文化の一側面 -」『久保和士君追悼考古論文集』
- 山下英明・川口洋平編 1997 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集
- 渡邊仁 1954 「対馬に於ける黒曜石工業：石器工作活動に関する若干の資料」『対馬の自然と文化』総合研究報告 №2, 古今書院
- 渡辺誠 1985 「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』2
- 〈韓文〉
- 岡田憲一・河仁秀 2009 「韓半島 南部 終末期 櫛文土器와 縄文土器의 年代的 併行關係 檢討」『韓国新石器研究』17
- 古澤義久 2011 「新石器時代 中期～晩期 韓日土器文化交流의 特質 - 東北아시아에서의 異系統土器文化 接觸의 比較 -」『韓國新石器研究』22
- 김미영 2010 「赤色磨研土器의 變遷과 分布에 대한 研究」『慶南研究』2
- 김미영 2013 「嶺南 中東部地域 赤色磨研土器의 地域性」『韓半島（赤色）磨研土器 探究』
- 柳昌煥 編 2009 『馬山 鎮北 網谷里遺蹟Ⅰ』慶南發展研究院 歴史文化센터 調査研究報告書 第79冊
- 孫寶基 1982 『上老大島의 先史時代 살림』수서원
- 宋永鎮 2012 「南江流域 磨研土器의 變化와 時期区分」『嶺南考古学』60
- 宋永鎮 2013 「南部地域（南江～蟾津江流域）赤色磨研土器의 地域性」『韓半島（赤色）磨研土器 探究』
- 沈奉謹 1979 「日本弥生文化 形成過程研究」『東亞論叢』16
- 安在皓 1992 「松菊里類型의 檢討」『嶺南考古学』11
- 尹武炳・任鶴鐘・吳世筵 2004a 『東三洞貝塚Ⅱ』國立博物館 古蹟調查報告 第34冊
- 尹武炳・任鶴鐘・吳世筵 2004b 『東三洞貝塚Ⅲ』國立博物館 古蹟調查報告 第34冊
- 尹武炳・任鶴鐘・吳世筵 2005 『東三洞貝塚Ⅰ』國立博物館 古蹟調查報告 第34冊
- 李相均 1998 『新石器時代의 韓日 文化交流』学研文化社
- 李相均 2003 「日本 対馬島の 縄文遺蹟」『韓国新石器研究』6
- 李憲宗・河仁秀・김영훈 2004 「巨濟島出土 新石器時代 新資料」『韓国新石器研究』7
- 林尚澤 2008 「新石器時代 大韓海峡 兩岸地域 交流에 대한 再檢討」『韓・日 交流의 考古学』
- 田中聡一 2009b 「東三洞貝塚 出土 縄文系土器와 그 意味」『韓國新石器研究』18
- 鄭澄元・安在皓・全玉年・李柱憲・李尚律・徐始男・李賢珠 1989 『新岩里Ⅱ』國立博物館 古蹟調查報告 第21冊
- 鄭澄元・河仁秀 1998 「南海岸地方과 九州地方의 新石器時代 文化交流 研究」『韓國民族文化』12
- 趙由典 1979 「慶南地方의 先史文化研究」『考古学』5・6

趙由典 1994『晋陽 大坪里 遺蹟』文化財研究所

趙現鐘・梁成赫・尹温植 2009『安島貝塚』国立光州博物館学術叢書 第58冊

최은아・마경희・김상현・김주연 2012『蔚山 黄城洞 新石器時代 遺蹟』古跡調査報告第27冊

河仁秀 2001「新石器時代 対外交流 研究」『博物館研究論集』釜山博物館

河仁秀 2003「嶺南地方 丹塗磨研土器의 編年」『嶺南考古学』10

河仁秀 2004「新石器時代 韓日文化交流의 黑曜石」『韓・日交流의 考古学』

河仁秀 2006『嶺南海岸地域의 新石器文化 研究』釜山大学校 大学院 博士学位 論文

河仁秀 2007『東三洞貝塚 浄化地域 発掘調査報告書』釜山博物館学術研究叢書 24集

河仁秀・李柱憲 2001「新石器時代의 対外交流」『港都釜山』17

韓永熙・任鶴鐘 1993『煙台島 I』国立晋州博物館 遺蹟調査報告書 第8冊

韓永熙・任鶴鐘・權相烈 1989『欲知島』国立晋州博物館 遺蹟調査報告書 第3冊

〈英文〉

Kagamiyama,T1955Dolmens in Western Japan.*Bulletin of the Faculty of Literature Kyushu University*.No.3.

Rye,O.S.1976Keeping Your Temper under Control. *Archaeology and Physical Anthropology in Oceania*.11-2

Sample,L.L.1974Tongsamdong:A contribution to Korean Neolithic culture history. *Arctic Anthropology*. X I -2.

図版出典

図1～図2筆者作成、図3～図6各報文、図7筆者実測、図8～図14各報文、図15-1～6,8～11報文、図15-7,12筆者実測、図16～図20各報文、図21河合編2002に加筆・改変、図22各報文、図23筆者撮影、図24～図25各報文、図26筆者実測、図27各報文、図28筆者実測、図29～34各報文、図35筆者作成、図36～図38各報文、図39沈奉謹1979、福岡県文化会館1978、図40各報文、図41小南2006を改変

補記

脱稿後、三万田式期の石製装身具が韓半島からの影響を受けたという大坪志子の見解は玉類の盛行期が韓半島と九州では異なるという理由で、本人によって否定されたこと（大坪2013）がわかった。本稿本文中でも述べたが、三万田式期に併行する時期の韓半島の玉類が不分明なことから、他の文化要素に全く韓半島の影響が認められないことから筆者は否定的に考えていたので、この撤回に賛意を表する。

大坪志子 2013「縄文時代後晩期における九州の石製装身具と韓半島」『韓国 先史・古代의 玉文化 研究』福泉博物館 学術研究叢書 第38冊